

人文学の没落
文献学の問題と方法に関する省察 (導論)

Der Untergang der Kulturwissenschaften
Reflexionen über Problematik und Methode
der philologischen Wissenschaften
Einleitung

Seinen hochverehrten Lehrern
Takeshi SHIMMURA[†] und Yutaka FUSE
in dankbarer Erinnerung
der Verfasser.

北 村 一 親

序

Ἦταν στρυφνός, οἱ φίλοι του ἦταν λίγοι (Σεφέρης (1979: 266))

本稿は筆者が「人文学の終焉、或いは過去との訣別」という副題を供し、1998年9月28日に行った岩手言語学研究会¹⁾における研究発表²⁾を基に、その後の東京外国語大学大学院での集中講義³⁾、筆者が独自に企画したロマンス語学セミナー⁴⁾、更に岩手大学人文社会科学部で筆者が

1) 本年2月21日に筆者による「ルーマニア語の方言研究——アルーマニア語(方言)を中心として」他2篇の発表を以て第48回研究会が開催された岩手言語学研究会は1992年10月10日に岩手大学人文社会科学部地域文化基礎研究講座の比較言語学研究室(当時)において当該教育科目担当の筆者と所属学生とで創設したものであり、第1回研究会を1992年11月5日に他学部教師も交えて開催した。その際に一部の関係者から広く開かれた研究会にしてほしいとの要望があり、第2回研究会からは筆者が全学及び学外にも呼びかけて学内外の数名の幹事による運営形式に発展させたが、その後、規模を縮小し、幹事も筆者(代表幹事)及び大野眞男、菊地悟等の本学関係者のみで構成されるに至った。

主な発表内容を発表順に列挙すれば、ヒンディー語・ウルドゥー語の生成文法、アイヌ語、琉球方言、アラビア語、コーパス言語学、エトルリア語、カフィラ語(ネイティヴ・アメリカン諸語)、ハンガリー語の格、ヴェトナム語声調、津軽中里方言、フリウリ語など多岐に亘り、発表者(敬称略。故人も含まれる)としては三輪譲二、川島淳夫、浅井亨、小倉肇、安達隆一、後藤斉、平田隆一、小林隆、大林太良、黒沢直俊、阿部宏、堀田英夫、佐藤和之、山本真司、等々の多彩な顔ぶれである。(北村(編)(1998a:87-88)に第35回研究会までの一覧がある。)

また、通例の研究発表のみならず、学部学生の卒業論文及び大学院生の修士論文の中間発表、あるいは講師を招いての勉強会を兼ねた「サマーセミナー」を1995年8月以来、開催していたが、こちらは最近、開く機会を逸してしまっている。

担当する講義・演習等の中で学生諸君に語ったことを再構成したものである。

向後、知性が軽視され、曲解され、⁵⁾若い世代が貧弱な知性に曝されることになるとしたら、また彼等がそのような状況の中で成長し、更に次世代を育てていくとしたら、燦然とした人類の未来を望むことは難しいであろう。⁶⁾我々は知性の時代の終焉を阻み、豊かな知性を眷養すべく全身全霊を賭して学道に情熱を注ぐ必要がある。マクス・ヴェバ（ウェーバー）が、„Nun kann man niemandem wissenschaftlich vordemonstrieren, was seine Pflicht als akademischer Lehrer sei. Verlangen kann man von ihm nur die intellektuelle Rechtschaffenheit“ 「大学で教鞭をとるものの義務はなにかということ、学問的にはなんびとも明示しえない。かれにもとめうるものはただ知的廉直ということだけである」（Weber（1919:24）、邦訳はウェーバー（1980:49）^{6 bis)}）と嘗て説いたのと同じく現在の我々、大学人に求められるものは、「知的な誠実さ、公正さ」である。

「大学は、政治的には、いつの世でも、無力であり、大学の武器は、精神力と真理だけ」（滝川（1960:28））であるからこそ時流に流されることなく、あらゆる感覚を鋭敏にして時局に臨む覚悟が我々に要求される。人文的知見は当にこの感覚を涵養せしむるものである。

2) 第39回岩手言語学研究会（1998年9月28日）において「ロマンス語学の課題（後編）——人文学の終焉、或いは過去との訣別」と題して筆者は研究発表を行った。これは1998年8月21日に青森県西津軽郡岩崎村（現深浦町）にて学生と共に合宿形式で行った筆者の研究発表「ロマンス語学の課題（前編）——全ロマンス語学の論考を終えて」の続編である。

3) 2003年1月7日から1月10日にかけて東京外国語大学大学院にて筆者は集中講義「ロマンス諸語比較研究」を行った。北村（2003）には本稿で載せきれなかった更に詳しい資料も収録した。

4) ロマンス語学セミナーは2003年9月29日及び9月30日に本学部で開催した筆者の独自企画によるもので、基本的にはロマンス語研究の方法論の一端を筆者が講義した。東京の大学院生3名と筆者の指導学生（ロシア人留学生）2名が参加した。当初は筆者が半年間準備した五つの講義を予定していたが、講義内容を保証する必要もあり、二つの講義しかできなかったことは自らの責任に帰すところであり、刻己の念あるのみである。斯学での反応やセミナー受講生の対応等から学界あるいは学問自体を筆者自身が再考する良い機会となった。筆者の学問領域では膨大な文献資料の前で時間を忘れて全生活を研究に打込む時代は最早、終焉を迎えたと悟った。

5) ある新聞社が「現在の日本における教養人とは誰か」という意見調査を行ったところ、上位を占めた人物は畏れ多くも T.M. [これは正式な略語] を別にすれば、ニュースキャスタ、首相（当時）、Dreigroschen 学者、俳優・タレント及び有名な首長等であったという。この結果を鑑みれば、現代における「教養」或いは「知性」という概念は決定的に変容したと言わざるを得ない。せめてもの救いは某国際連合難民高等弁務官（当時）の名前が挙げられたことであろう。

サイド（1998:136）が主張するように教養人・知識人は「アマチュア」たるべきであり、各種の補助金等の援助を国家から受ける現在の大学人は本来的な教養人・知識人とは言えないことになる。「アカデミック」という語を現在の日本では第一義として「学問的・学術的」の意と解するが、欧米では寧ろ「大学」という組織に関連する文脈の中で用いることが多い。（嘗ては日本の知識人たちも academic freedom を「大学組織の中の自由」と捉えてきた。例えば、新村（1994:87）や瀧川（1963:68）において「大学の自由」をその訳語としていることから窺える。）この点でも「アマチュア」は「アカデミック」に対する概念であり、どんな利害にも縛られない自由人、即ちジェントルマン・スカラを意味する。

6) 岡倉天心が引いたところに拠ると、宋の詩人、李仲光（肯堂）は世に最も悲しむべき三つの事として、名画の俗悪な鑑賞及び手際の悪い茶の点て方と並んで「誤れる教育のために立派な青年をそこなうもの」を挙げているという。（岡倉（1961:31））

「誤れる教育」の結果がどうかの明言は控えるが、某国立大学（当時）でのことである。近年、大学生が読書は疎か新聞までも読まなくなったため、「学生にぜひ読んでもらいたい [新聞] 記事等はコピーをとり、90分間講義の前10分間の時間を割いて学生一人ひとりに配布して読ませ、後日、感想を提出させている」らしい。この一文に続けて、「小・中学校で授業の初めに読書しているのと同じことを大学で実行しているわけだ。」との由。（山本（2004:7b））嘗て、マッシュ・アーナルドが「現在の社会では、充実した、価値ある生活を送るか送らないかは、その日のうちに読書するかどうかによってきまる」（アーナルド（1965:11））と述べたことは昔日の追懐となってしまう、今は只、「無教養と秩序」あるのみ。

周知の如く、劣僕なる筆者は諸彦諸賢には及ぶべくもないが、弱才乍らも研究及び教育を行う上で経験し思料したことを人文学の発展のために微力ながら供することができれば幸甚であると考え、本拙文を起稿した次第である。故に本稿にて筆者が所懐を述べるに僭越な点、数多あれども、平に御容赦あれかし。

以下、先んじて現在の日本における知性の悲況を一瞥し、人文学的知見を涵養することが如何に大切であるかを提示する所存である。本稿は晦渋な措辞、並びに煩多な憑拠の多用にも拘らず耐忍の上、読過される聖哲諸氏に供せんとするものである。“And he said unto them, He that hath ears to hear, let him hear.”

「人文学」に対する概念定義は「人文学方法論（別稿）」にて行うが、本導論を通読する上で必要な程度の定義をここに示しておくことにする。本稿でいう「人文学」とは「自然科学」Naturwissenschaft と対立する概念であり、方法論においてハインリヒ・リケルトが相対的に「一般化的」として「自然科学」と対立させて、相対的に「個性化的」として非自然科学の諸学を統括した「文化（科）学」Kulturwissenschaft と等価である。^{6 ter)} 但し、本稿では「人文諸学」という観点から正確には Kulturwissenschaften と対応するが、「人文諸学・文化諸学」とはせずに、総称的に「人文学」という名称を用いた。誤解の無いように付言するならば、Kulturwissenschaften と言っても本稿は文献学的伝統を基盤に据えることをあくまで重視するという点で当代の「文化科学」cultural studies とは一線を画する。アラン・ソウカルの『ソウシャル・テキスト』誌事件が本稿の意趣を代って表しているのでここでは更なる説明を省略する。（ソウカル/ブリクモン（2000）。当代の「文化科学」に対するゲルマニストからの批判は木村（2003）を参照）

6 bis) 邦訳の底本はウェーバー（1980:81）によると「1968年に出たウィンケルマン編『科学論論集』第3版」とのことである。筆者は原著として初版（パンフリット）である Weber（1919）しか見ていないので詳しい言及は控えるが、邦訳と Weber（1919）とでは僅かに細部が異なる箇所も見受けられる。

ヴェーバがこの講演を行った1919年は第一次世界大戦でドイツが降伏した直後であり、その後のドイツは超インフレーションによる経済破綻で苦悩が続くことになる。（筆者は北村（2004b）を執筆する際にある文献学的目的のため当時のベルリン市の統計年鑑でライ麦パン価 Roggenbrotpreis と小麦パン価 Weizenbrotpreis を調べたことがある。）そして NSDAP (=Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei) が台頭し、ナチ政権ドイツ（俗な言い方で恐縮だが Nazideutschland）の時代となる。当時の若者たちは教師ではなく指導者の出現を待望しており（Weber（1919:28-29））、行き着く果てがアドルフ・ヒトラーによる政権掌握であった。「あの残虐 [= ナチ政権下でのユダヤ人大虐殺] を思うだけで人間の知性はぐらつく」（カーン（編）（1991:93-94））という名チェリスト、パウ・カザルス・イ・ダフィリヨの言葉が重みを持って想起される。

邦訳初版の1936年は日本も世界の例に外れず暴力に満ちた時代で、その数年後に忍び寄る人類史における漆黒時代の幕開けへの前奏曲を協演していたのである。翌1937年には刑法学者の瀧川幸辰が「そんなもの [同人誌活動] は問題にならん、事件にはならん」と楽天的に語る（新村（1994:94））のに反し、中井正一、真下信一、そして我が敬愛する恩師、新村猛等が検挙されるという『世界文化』同人事件が起きている。（奥平（2006:219）で言うように、「毎号きちんと検閲をとっていたのであって、三ヵ年弱のこの雑誌存続期間中、一度として出版警察上問題になったことがない」のである。）我が師、新村猛が半世紀前の事件を淡々と回顧するかのよう静かに空を見つめながら筆者に語ったところによると、「その日の夕方には家に帰るつもり」だったという。しかし、師の思わくとは反対に拘禁は約2年にも亘ったのである。テニスを嗜み、文学と平和をこよなく愛した篤義の士が迫害されるような時代が二度と来ないことを希求する。（ノーム・チョムスキー（例えばチョムスキー（2005:55））は第一次世界大戦において戦争に批判的なパートランド・ラセルが投獄されたことをしばしば引証する。）なお、『世界文化』同人事件に関しては新村（1994:42-110）に詳しい。

6 ter) リッケルト（1939）参照。当時、リッケルトは「近代自然科学の創建者たちの間で、あれほど豊かな實りをつけた方法論的探究への意向は、文化科学の間では微々たるものである」としながらも、「自己の営みの本質に關する相當突込んだ」数少ない研究として言語学のヘルマン・パウラーや [社会学・] 経済学のマクス・ヴェーバを挙げている。（リッケルト（1939:32））

アルヴィン・カーナンが言及する領域は本稿とは異なり、「社会科学」分野が含まれないが、最も判りやすい言葉で「人文学」の核となる概念を説明しているのでここに引用しておく。(その邦訳で「人文科学」としている英語の原語は *humanities* である。)カーナン曰く、「人文科学とは、人間が語る物語、人間の思考方法、人間の過去の姿、言葉によるコミュニケーションや説得、そして、なかでも人間の存在の奥底を突き動かす音楽などの研究からなる。これらの学問領域は、換言すれば、最も根本的な人間的な知の方法についての研究であり、日常生活を送るうえだけでなく、人間が生きるうえで最も役に立つものである。」(カーナン(編)(2001:3))

筆者としては極度にスコラ学 *Scholastik* に傾くのを避けながら、*Logica* (論理) として統括される *Artes sermocinales, logicae, verbales* のトリウィウム *Trivium* を中心に、*Physica* (自然) として纏められた *Artes reales* のクワドリウィウム *Quadrivium* をも包容させて、つまり「人文」と「自然」を連繫すべくアルテス・リベラレス *Artes liberales* (*Freien Künste*) を常に視野に収めて人文学研究を進めたいと念じている。これは人間が宇宙をも含む壮大な自然と調和するための欠くべからざる視点であると考え。 (アルテス・リベラレスにおける諸学に関しては Koch (hrsg.) (1959) の諸論文を参照。)

なお、外国語の固有名を片仮名表記する場合、『外来語の表記(内閣告示・内閣訓令)』等を参考にしながらも原語の発音を可能な限り忠実に写すことを旨とした。外来語音ということで日本語の音韻体系の枠組みから外れることがあることも明記しておく。よって、筆者の表記が翻訳者の表記あるいは一般に普及している表記と異なる場合も生じたが、翻訳書の書誌的記述では当然ながら翻訳者の表記法を踏襲した。(但し、今更、如何ともし難い国名等の表記においては慣用に従わざるを得なかった。)

略語「怪」

本邦には「学術形成の国家的ヒエラルキ」とでも称することができるような一連の学術的階層構造がある。内容は至極、単純で、学生は大学教師に指導され、その大学教師は所属する学部で人事等の評価がなされ、その学部は大学内で予算等を査定される。究極的に大学は文部科学省に自らの存否すらも委ねることになる。しかし、この階層構造に疑慮せざるを得ない数々の事実がある。疑問を抱かざるを得ないような矛盾は世の常として当然かもしれぬが、些々たる例を次に示すことにする。

大学が競って予算獲得を目指す文部科学省の研究計画に「21世紀 COE プログラム」というものがある。仄聞するところによると平成16年度に採択された計画は24大学28件で、総事業費31億円であったが、平成19年度は66大学158件の総額218億円にも上るとのことである。当に一攫千金を夢見た *forty-niners* の気概であろう。大学経営に全く疎い筆者は採択を目指してこの名称を口にする周囲の人々にこの英語の原綴を借問したところ当初、多くの者は答えられなかった。企画が昂進してから再度、尋ねると、さすがに今度は原語を教示してくれた。COEとは「卓越した研究拠点」を表す *Center* (*Centre* という綴りをこの種の人々は知ろうともしない) *of Excellence* の略語である聞き、暫し啞然とした後、「この略語は間違いではないか」と問い返した記憶がある。その後、何人かにこの英略語の話をしたが、今までに「COE という略語は可笑しい」と同憂してくれた大学教師は1名のみであった。「知の時代」⁷⁾ の日本における学術的階層構造の頂点に位置する文部科学省の命名である。“*Dreadful sorry, Clementine*” と

でも嘯くのが一学窮として軋轢を生じさせない賢明な選択なのである。^{7 bis)}

だが、最近でも臆することなく FoS なる略語を大々的に喧伝して国際シンポジウムを開催している。FoS とは *Frontiers of Science*、即ち「先端科学」の謂いであるらしい。ここまで来れば病は膏肓に入ってしまったも同然である。然らば、第二次世界大戦後に日本中が政治経済、科学技術や教育等々の範としてきた超大国名の略語は USOA とでもすれば宜しかろう。筆者は遙か昔、高等学校の「グラマー」(英文法)の時間に英語の大文字使用法と略語の作り方を、二人称単数の代名詞 *thou* 等の付随的な知識と共に学習した記憶がある。(ピリオド、即ち省略点を各大文字に付けるのが本来的であるが——因って先に挙げた超大国名の略語の正解は

- 7) 「大学(国立大学)の構造改革の方針について。[...]「知の時代(Knowledge-based Society)」^[ママ]とも言われる21世紀に入り、人材大国・科学技術創造立国を目指す我が国にとって、「知の創造と継承」を行う大学の役割は極めて重要です。」(文部科学省高等教育局(2002))

日東疲弊し、此誠に危急存亡の秋[とき]である。先漢に反して、小人に親しみ、賢臣を遠ざけて、後漢王朝は凋落していったことを忘れてはならない。

- 7 bis) 「21世紀 COE プログラム」の金脈を掘り当てた(と言っても、当初からある程度、どの大学が採択されるか予想できるのがこの業界の常であるが)大学には誇らしげにポスタが掲示されている。一流ホテルの名前の入った便箋のように、そのポスタには“21st century COE program”と印刷されている。

この和蘭語が独逸語のような英語を眺めていると、小中学生や高校生、大学生よりも、まず、日本の頂点から学力をつけ直した方が良いのではないかと思うのは筆者だけであろうか。英語はゲルマン語の出自ながらノアマン・コンクエスト以降の何百年もの間、フランス語の影響を受け続けたことを山事に携わる方々はお忘れなきよう。『チャタリ令夫人の情夫』を書いたデイヴィッド・ハーバート・リチャーズ・ロレンスの夫人の前夫で、ロレンスの師でもあるアーネスト・ウィークリが著した『言葉のロマンス』でも読まれたら如何なものか。因みに、「ロマンス」という点においてはウィークリのものよりは、かのリヒトホフェン男爵家の出であるフリダ・ロレンス、即ち元ウィークリ夫人が書いた『私ではなく、風が...』(このタイトルは周知の通り新たな夫君作の詩の *incipit* より採られたものである)の方が皮肉にも一枚上のようであるが。“The thing that David had done displeased the LORD”か否かはフリダが“I did not want to write this book. I wanted to give Lawrence my silence” (F. Lawrence (1934:vi))と書いているので筆者としては不本意ながら「風だけが知っている」ということにしておこう。

研究努力の臨界質量を備えた *centre of excellence* を構築するために、「COE」の方は“evaluation”しないでおくことにしても、日本語で「研究拠点形成費補助金」(平成14年度文部科学省高等教育局通知第232号)という立派な名称があるにも拘らず、無理をして英略語を使用するのは「方法論(別稿)」にて述べる外見だけの、器だけの、見せかけだけの日本文化を象徴しているように思えてならない。知ったふりをして、判りもしない英略語をあらゆる分野で乱用するのは、知性の衰微に拍車を掛けるだけである。同省には MEXT という粹な発想もある故に知士なきは偏に知性の「拠点」である学宮のみか。

- 8) 当時の知的状況を示す一文を紹介する。「ぼくが学生時代をおくった1960年代後半から1970年代にかけての時期は、おそろしくいい本が津波のように出版され、友達のだれもが、ただひたすら恍惚となって本を買い集めていたように思われる。」(植島(1989:23c))

また、ある対談で、渡部昇一が『大字典』の著者の一人、飯田伝一の詩作に言及したのに関し、白川静が「あの時代の人は学力がありますからな」と返していた。(白川/渡部(2001:132))白川はこの直ぐ後で「漢文を廃止してしまったことによって、日本人は大人になり損ねていると思います。漢文を読んで、漢詩を読み、文章を暗唱して、というふうになると、向こう[中国]の文豪と同じような気持ちになって自分が脱皮できるんですよ。それが今は蟬が抜け損ねたみたいな状態になっている。だから早く、そういう大人の学問を回復しなければいかんというふうには私に考えています。」(白川/渡部(2001:147)。下線は筆者)と力説している。ここで言う「学力」とは勿論、白川自身が編んだ『字通』で引いた范成大(件の『維基百科』において「其诗风格轻巧」とある)の詩に出てくる「学力」のことであろう。

夢野久作(本名、杉山直樹)の長男が久作の思い出話を語ったところによると、「いつも優しかった父が、私が学校で習った『大学』の素読をしていると飛んできて、『杉山家の人間がそんな読み方はするな』と大変な剣幕で怒られた。私は『民に親(した)しむ』と読んだのだが、父は『民を親(おや)にす』と読め、と叱ったのだ』ったという。(杉山(2007:323b-c))言葉を慈しみ大切にするという習慣は古き良き時代の昔話になってしまった。

U.S.A. である——、学術分野では現在、省略する傾向にあり、例えば、*N.E.D.* の新版は *OED* となる。) 当時の年長者たちが若い世代の者に少しでも良質な知性を提供しようと努力していたからであろうと思ひ巡らすだけでも、あの時代の人々の知性に対する深慮が伝わって来るのである。⁸⁾

日本の市井に氾濫している英略語に注意していると、学会まで結成した NIE (Newspaper in Education) を始めとして生活に関わる方面で QOL 或いは QoL (Quality of Life) があり、LOHAS (Lifestyles of Health and Sustainability) に至っては、沙翁がチェザレに第3幕第1場 (JC III, i) で言わせたように、「そしてお前もか、接続詞よ!」と思わず叫びたくなる。(残念ながら筆者作のこの科白がラテン語ではないため、かの劇ほどには臨場感が無いが。)⁹⁾

大学における英語教育において「シェイクスピアは実用面で役に立たないので無用である」という声が主に実学系の学問を専門とする教員から上がることがあるが、彼らが求める英語力とは上に挙げたように英略語の構成も品詞の違いも判らない程度の知識なのであろうか。尤も S.O.B. というような言葉を口にするような品性しか持ち合わせない英語で宜しければ話は別である。¹⁰⁾

「方法論 (別稿)」にて述べるように正則の深い理解さえあれば、表記方法は自由であると筆者は考える。寧ろ一義的にしか考えられない狭量な見解は排除されるべきである。然し、何故に斯く迄も、略語に固執するかと言え、略語は人文学における研究遂行、特に文献や資料を操作するための要だからである! 略語とその重要性に関しても「方法論 (別稿)」に譲ることとする。

9) 総務省関連で「戦略的情報通信研究開発推進制度」というのがあり、略称は SCOPE で Strategic Information and Communications R&D Promotion Programme の略語であるらしいが、これに至っては荒唐無稽である。C-17 グロウプ・マスタ III 等の STOL (Short take-off and landing) は適切な略語なので、US Air Force を見習ってほしいものである。また、英語の母国語使用者だからといって正しい略語を作れるとは限らない。聾関連で使用される略語に CODA (Children of deaf adults) があり、これはミリ・ブラザという米国人が作った略語であるにも拘らず正しいとは言えない。先の「COE」に話を戻せば、我々がここで略語として範とすべきは、NASA の ICE であり、スタンフォード大学の COE ではない。クラレンドン印刷所の組版と校正の指針である [ハート] (1983) には SOGAT (Society of Graphical and Allied Trades) や I.o.W. (Isle of Wight) なる略語があるが、筆者はこの略し方に与することはできない。「主要語」の概念が母国語使用者ながら理解できていないのである。ヴィクトリア女王のオズボーン・ハウスで知られるワイト島ならば筆者の知る略語は I. W. である。何よりも略語は元の語句がある程度、脳裏に浮かぶものでなくてはならないと筆者は考える。

10) 2007年8月の新聞報道によると、「2009年度」^[マ] から一般医薬品の販売制度が変更されるのを前にして90社から成る某協会は医師の処方箋無しで購入できる一般医薬品の呼称を「大衆薬」から「OTC 医薬品」に変更すると発表したという。「OTC」とは「オーバー・ザ・カウンター」[Over the Counter] の「頭文字」との由! この伝でいくと、キャンザスのドロシ・ゲイルが歌う lullaby は「OTR」なのか? 困ったことはレモン・ドロップのように溶かしてしまうのか? — “troubles melt like lemon drops” (フレミング (1939)) どうか、薬や株を買う序に彼らに「真つ当な」英語の知識を教えた方が良いでしょう。

斎藤勇は学生たちにヘブリディズ諸島が千島列島のような所であり、ホース・チェスナトは東大の三郎池の傍らに生えているマロニエの木だと語ったという。(荒(1975:108)) 文学専攻であれ、語学専攻であれ語学教師は多かれ少なかれ、このようなレアリエンに関する知識を有していた。しかし、現在では、各専門分野の教員が英語で書かれた当該分野の専門書を語学の授業として講ずる傾向にある。ますます、世の中の英語が貧弱になっていくような気がするのは筆者だけであらうか。その発現が略語の COE であり、OTC であらう。それにしてもこのような略語を作る手合いは自国の古典文学にも関心が薄く、“In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.” (Murasaki Shikibu (c.1000=1978:1,3)) という Paulownia Court の物語なども読まないのであらう。このままでは人文学が没落するのは時間の問題かもしれない。

「全球化」時代の大誤解

外国からの留学生にとって理解しがたい日本の制度の一つに「年度」による紀年法がある。日本国内のみの共通理解として「平成19年4月1日から平成20年3月31日を平成19年度とする」ということまでは元号を使用するということと相俟って日本固有の文化として当然、問題は無い。ここで日本のお役人は（と言うことは、即ち日本国民は¹¹⁾）「国際化」と称して年号の箇所のみを西暦に置き換えて「2007年度」なるものを恥ずかしくも無く創り出してしまった。大袈裟に言えば、「恐れていたことが現実になった」のであるが、西暦、即ち「御出生」以来のキリスト教的紀年法を「年度」と組み合わせただけで国際化したものと勘違いしているようである。西洋の碑銘に“ANNO DOMINI”とあるのを見れば、西暦の有する意味と彼の地で生まれ育った人々にとって西暦が如何に意義深いかを理解できるであろう。

人文学に携わる者が秋期から新しい巻付けが始まる学術雑誌を過去に少しでも手にしたことがあるのなら、西暦の複数年に跨る表現法は理解しているであろうし、何も学問に限らずとも米国の「ベースボール」ではなく、ヨーロッパの「サッカー」（例えば、イタリアのセリエ・A Serie A）にでも関心があればこの程度のことは自ずと判ることである。硬にも軟にも疎いのが日本の知性なのであろうか。“Ravvedetevi, perché il regno dei cieli è vicino.”

11) 日本における上意下達の習性は日本人に心底、染み付いており、今後も決して払拭することはできないであろう。好例を示すことにする。米国のジュリアード学院に留学している某若手日本人ヴァイオリニストが同学院の「出席ポリシー」として某音楽情報誌（2005年1月刊）で紹介しているのが、選挙に行く場合の excused absence である。同氏曰く、「風邪をひいて休んでも病院に行きドクターから診断書を貰わない限り欠席許可はおりにないのに、選挙ともなるとそれは許されてしまうのですから、国の力は凄い」（下線筆者）と。これは明らかに日本人的発想に由来する米国の選挙や人権に対する無知であると思われる。米国人は自己の権利を最大限に行使して自分たちの代表者を選び、学校側はその個人に付与された権利を保障する義務があり、決して国家がその権力によって各有権者に選挙に行き投票することを強制しているわけではないのである。そして元来、国家とは各々の個人から形成されていくものである。そもそも、風邪と選挙を同列に置くこと自体が個人の権利と義務を忘れてしまった日本人のお粗末さなのであろう。

12) Saussure (1967:320) による。ソシュル『一般言語学の講義』（以下、CLGと略）のトゥッリオ・デ・マウロによるイタリア語訳（Saussure (1967)）の解説的注釈部分をルイ・ジャン・カルヴェがフランス語に訳した注釈とカルヴェの後書をCLG第3版に併載した版の当該箇所（Saussure (1985:353)）では第3回講義は1910年10月29日からとなっている。日本のソシュル研究者達は「1910年10月28日（もしくは29日）から」としている。筆者はソシュル研究の専門家ではないので、この辺りの事情には暗いのが残念である。

それにしても一連のCLGフランス語原典版は編集・校正・印行において迂闊に過ぎる諸版である。Saussure (1985:319) においてソシュルの生年は「1871」年となっているが、これでは例の『印欧諸語における母音の原初体系に関する覚書』の出版時に僅か7歳であったことになる！（『覚書』は刊記としては1879年だが、前年末に印行されていたと言われており、Bally ([1913]:29) では“antidaté”と注記している。この語は通例、「日付を前にされた」の意で用いられるが、このように postdaté 「日付を後にされた」の意でも使われる。）

過誤の原因はデ・マウロによるイタリア語訳所収の注釈の当該箇所（Saussure (1967:285)）の生年の右肩に「1857¹⁾」と注番号があるためフランス語原典に載せるべく翻訳する際に「1871」と誤ったものであろう。人物誌的注釈の第1頁の第1行目で、何よりもソシュル本人の生年であり、単純な誤謬とするには余りにもお粗末である。CLG原典として流布している版であるだけに悔やまれる。

因みにソシュルは1857年11月26日に生誕して1913年2月22日に死去しているので、（Saussure (1967:285, 325) 小林英夫による邦訳「改称版」所収の解説において「享年57」（ソシュール (1972:xxv)。小林訳の先行諸版には無い）とあるのは今さらながらの数え年計算であることに注意したい。兎に角、数字は魔物である。

フェルディナン・モンジャン・ドゥ・ソシュルはジュネヴ大学で1907年1月16日～同年7月3日、1908年11月第1週～1909年6月24日、1910年10月28日～1911年7月4日の三期に渡り一般言語学を講義したが、¹²⁾ これを見て1906/07年度、1908/09年度、1910/11年度の「隔年開講」であることが判るのが国際感覚であろう。内閣に設置された評判芳しからぬ「教育再生会議」の第二次報告(2007年6月1日)では大学・大学院の9月入学を大幅に促進させるべく国公私立大学において4月入学の原則を撤廃するように促しているのだから、“academic term”を「有識者」の方々が彼らの知性を駆使して何と表現するのか今回も大いに楽しみである。

国際化或いは国際的という誤解のもとに日本で行われている奇行の数々を以下、簡潔に続けるとする。日本では15年程前に国際化の一環として公文書の用紙判型を従来のB判規格から国際規格のA判規格に変更した。これに従い学内の配布文書も従来のB列5番の判型(B5判)からA列4番の判型(A4判)に変更されたが、当初は紙面が有効に使われず、用紙の余白が多くなっただけで、結果として資源の無駄遣いになっていた。中でも噴飯ものなのは用紙サイズが国際的な規格の文書に「平成～年～月～日」と国際的には理解不能な元号が使用されていることである。

金額などの数値を示す場合、「アラビア数字」を三桁ずつ位取りすることなどは何と従順であろうかという思いで一杯である。確かに諸外国との通交において誤解は生じないかもしれない。しかし、“thousand, million, billion”と三桁ずつ単位名称が変わる欧米(この場合、仏米と言った方が正確かもしれない)の言語とは異なり、現在、日本語は「万、億、兆」という具合に四桁ずつ単位名称が変わるので、欧米人は位取りの付いた数字を見れば、即座に理解できるのに反し、日本人には無意味な丸暗記が要求される。¹³⁾ ただし、仏米式といってもフランスでは「.」と「,」の使用法が日本とは逆である。例えば、フランス語では百万は「1.000.000」、円周率(概数)は「3,14」と表記される。日本で言うところの国際化とは米国化と等値であることを改めて認識させられる。¹⁴⁾

日本人のパソコン使用者の大半が日本語をラテン・アルファベット(所謂、ローマ字)で入力しているが、^{14 bis)} 中国語や韓国・朝鮮語の書記体系に比べると単純な仮名という音節文字を日

13) 我々が公文書として作成する文書では3桁の位取りのため、「500千円」のように金額の単位が「千円」となる。中国で出版された書籍の奥付を見ると、「145千字」という出版に関する情報が記されている。(この中国書は1980年代の刊行物である。)彫心鏤骨とは当にこのことか。

14) 前にも言及した「現在の日本における教養人」に選ばれた某首長は、記者会見で「フランス語は数も数えられない言語である」旨の発言をしていた。フランスの生んだ大数学者であるジャン・バチスト・ジョゼフ・リエやジュール・アンリ・プワンカレは数を数えるのにさぞかし苦労したであろう(という疑念すら抱かなかったのであろうか)。また、桁が多くなると最早、固有の日本語では表すことができず、隣国の言語の助けがなければ表現できないということにも是非、気付いてほしい。Vive la France! 教育家们联合起来!

14 bis) これに関して筆者には一つの推論がある。パソコンが爆発的に普及する直前に書かれたパソコン入門書を紐解けば「絶対ローマ字入力のほうを勧め」る(藤田(1990:20-21))理由が判る。同書曰く、「パソコンの命令は一般に英語が多いので、それを実行するときは英字を入れなくてはなりません、ローマ字入力を覚えていると、より速く的確になります。」(藤田(1990:21))と。「パソコン通信」をしていた時代のことである。現在のように一定の簡単な約束事さえ知りさえすればパソコンに関する専門的な知識がなくてもパソコンを駆使できる時代において、初心者でもプロンプトに応じてコマンドを自分で入力しなければならなかった時代と同じような苦勞をする必要はないであろう。

ただし、現在のパソコンはキーボード配列を含めてハードウェア、ソフトウェア両面で日本語本来の文字入力には不向きであるように思われる。

本人が利用しないのは誠に残念である。パソコン入力に関しては膨大な数の漢字のみを用いる中国語や表音記号を組み合わせるハングルを用いる韓国語・朝鮮語より有利な点が日本語の仮名には存するのである。¹⁵⁾ 仮名入力ならば「漢字仮名交じり表記 → ローマ字表記 → 再び元の漢字仮名交じり表記」と頭の中で変換するというローマ字入力の労力は軽減されるであろう。聾者や中途失聴者等のためのパソコン要約筆記通訳では入力速度の点で勝る仮名文字入力を使用しているようである。

これらの諸々の点を指摘すると、必ず返ってくる反応は「慣れているから」という言葉である。ここで注意を喚起しておきたいのは世の中では「慣れ」を「正しさ」と誤認していることである。慣れ親しんだ事柄の誤りを指摘されれば、ありとあらゆる反論を試みようとする。それ程までに「慣れている」ことは「正しい」ことなのである。どのようにして「慣らされて」きたのか、その「慣れ」は正当なものであるのかを今一度、考え直した方がよいと筆者は考える。逆に「知らない」ことは「間違っている」ことだという余人の判断にもどれだけ辟易させ

15) 漢字仮名交じり表記は「国語」の正書法として論争がないわけではないが、日常的に使用されるのに反して、使用される機会がそれ程ではない日本語を表すラテン・アルファベット、所謂、「ローマ字」には何種類かの表記法があり、ジェームズ・カーティス・ヘブバーン（所謂、ヘボン）が編纂した『和英語林集成』や外山正一やバジル・ホル・チェインバリン等の「羅馬字会」の系統を汲む「標準式（ヘボン式）」、田中館愛橘や田丸卓郎等の「日本式」、文部省が公布した国定の「訓令式」という三つの普及している方式の他にもエスペラント式（石黒修）、服部式（服部四郎）等々のローマ字表記法がある。特に、前三者はそれぞれの支持勢力が拮抗しており、どの方式もそれなりに使用されているのが現状であり、これに応じてパソコンへの入力も何通りかの方式が設定されている。

編者の桑原武夫の校訂に関する説明によると、石川啄木の『ローマ字日記』では日本式→ヘボン式→日本式と書法が変転したり（Isikawa (1977:266)）、第二次世界大戦直後の昭和22年2月28日に文部省が試案として発表した「ローマ字文の書き方」（文部省（1949））には訓令式が中心となって解説されているものの、「補注」として「標準式（ヘボン式）」及び「日本式」の表記法の例も掲載されているというように早い時期から今日に至るまでローマ字表記法は錯綜しているのである。

後者の「日本式」は先にも述べた通り、田中館や田丸が強力に推進したもので、「訓令式」の基盤となっており、実用的解説は田丸（1942）に詳しい。田中館愛橘は日本におけるローマ字運動を展開しただけではなく、世界の全ての言語に統一したラテン文字 Roman characters / caractères latins を採用するように国際的な働きかけをしている。例えば、この件に関して第一回国際音声科学会議（アムステルダム、1932年7月3日～8日）において国際知的協力委員会の活動として提案している。（Tanakadate (1933:216)）（この会議で田中館はダニエル・ジョウンズ、ロマン・ヤコブソン、トゥルベツコイ公爵等といった大家に混じって討議している。なお、1927年の国際知的協力委員会の模様を撮影した写真が岩手県の二戸市シビックセンター提供で盛岡市先人記念館（2003:11）に転載されている。）

因に、服部（1947）は精密な音声学と緻密な音韻論を駆使して理論化されたローマ字表記法の提案であり、その冒頭に種々のローマ字表記法に関する簡史的な解説があり、また、田丸（1942:37-48）にはその他の南部式、左近式、片山式等々の表記法の概説がある。

16) ここでは詳述する余裕はないが、漢字の筆順や点画の問題は制度成立時における柔軟な理念が年月を経るにつれて忘れられて硬直化していく好例を我々に示してくれる。例えば、教育現場で漢字の筆順指導に関する拠り所とされる文部省『筆順指導の手びき』（昭和33年3月）には「もちろん、本書に示される筆順は、学習指導上に混乱を来さないようにとの配慮から定められたものであって、そのことは、ここに取りあげなかった筆順についても、これを誤りとするものでもなく、また否定しようとするものでもない」（文部省（1958:7）、下線筆者）と明記され、「必」の字の筆順は3通り示されているのみならず、「その他」の筆順も可能であることが明示されている（文部省（1958:23））にも拘らず、その後の教育現場では上記『筆順指導の手びき』以外の筆順を認めなかったという事実が硬直した教育行政を如実に物語っている。（小林（2003）は筆順に加えて字体に関しても教育的な示唆に富む。）「筆順は毛筆で書く時のために重要である」という意見もよく耳にするが、毛筆書道では筆勢により筆順を変えることもあることを理解する必要がある。何よりも貝塚・藤野・小野（1959:1304）では「草書体の筆順は、[楷書体の筆順とは]全く別の系統に属するものである」と明言している。

られたことであろう。詳説する余裕は無いが、漢字問題¹⁶⁾の場合もまた然りである。

また、これらを「瑣末な問題」と一蹴される場合も多いが、反対に筆者はこれらの問題を見つめることにより、学問をする究極の目的であると筆者が考える「真理を見極める力」を養うことができることを確信している。「(大学の)学問は実社会に役立たない」などという戯言は真の学問の力を知らない痴れ者の物言いである。

国際化することは日本人としての品性を消し去ることでもない。近年、鳴り物入りで開学した国際〇〇大学の「設立の趣旨」の中に出てくる「ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて複雑に行き交い[...]」という文言は大学の根本となる文書としてその品性の点で空しさを覚える。この大学の英語名称は(恐らく英語の方が基本となると思われるが)“△△ International University”である。△△には地方名が入るのだが、日本語名称には表現されていない! 反対に、日本語名称の〇〇(普通名詞が入る)は英語名称には現れない。「複雑怪奇なる新情勢」を生じさせるのは「欧州の天地」ではなく、日本における国際化なのである。

これらの独善的で狭量な浅見に反し、人文学を真摯に追究する者は人種や国境を超えた広闊な世界観を養うことができ、その結果、豊饒たる精神を培うことが可能になるのである。金田一京助は『東方言語史叢考』の著者、新村出を評して、「内外の載籍、新古の文献、その涉獵の広さ、ことば通りに学東西をあわせ、識古今を貫き、これをやるに、行くとして可ならざるなき麗筆」(金田一京助(1964:93))と賞賛し、そしてこの金田一京助の学問を折口信夫は「科学の組織に、詩の情熱のたぎり」と評したという。(金田一京助(1964:274=三省堂編修所による「あとがき」所引))このように循環する知的な涉獵と情熱の発奮こそが当に人文学の到達すべき至高の極致であろう。

学界及び大学を巡る状況

日本の学問世界における摩訶不思議な事象は少なからずあろうが、ここでは人文学系の学問領域に関して取り上げることにする。

某学会の機関誌(2001年12月刊)には論文等の他に1編(英文3頁)の「書評論文」と2編(共に和文で、6頁及び3頁)の関連書籍の「紹介」が掲載されている。問題となるのは英文3頁の著述に比して和文6頁及び3頁の著述が分量的に見ても、更に内容的に見ても差が無いにも拘らず片や研究著述としての扱いが上位等級の「書評論文」、片や「紹介」という具合に投稿論文の位置付けが異なる点である。英文「書評論文」の著者は外国人研究者であり、奇しくも「2001年度」^[ママ]の編集委員の一人である。因みに、これら3編の英文目次における分類は全て等しく“Review”である。

また、2006年12月刊行の同誌の巻頭論文は会長就任講演を文字化したものである。同誌の「執筆要項」に参考文献は「第1著者のアルファベット順に並べる」とあり、見本まで掲載されており、それによるとラテン・アルファベット順(漢字はローマ字綴りを想定)に配列されている。しかし、上記巻頭論文は、欧文文献が使用されていないことあろうが、要項には指示されていない五十音配列になっている。

他の人文系の学会に比べると格段と厳しいはずの同学会の論文投稿でありながら、査読者や他の編集委員からの指摘は無かったのであろうか、また、特別の役職に就いていれば会則などは遵守しなくてもよいのか甚だ疑問である。

ある諸言語に関する学会の機関誌(年1回刊)の2000年刊行号にはこの諸言語の文法理論に

関する論文が載っている。「(当該) 諸語における～研究」と銘打ちながら、一つの言語(イタリア語)に限られた用例と、時折、説明を補うため英語の用例が資料として提示されている。例外として、本文中に「チチワ語」(chi-は名詞クラス接辞なので正しくは「チェワ語」。Chingereziに現を抜かしては判るまい)が1箇所、「註」にフランス語が1箇所と「イタリア南部の方言(Arbëresh)」が1箇所、資料として提示されている。ただし、全て資料は他の文献からの、しかも資料集や方言集、辞典・語彙集などからではなく、他の研究者の研究書(最も多く引用したイタリア語に関しては総じてルイジ・ブルツィオの1冊の研究書)から既に分析されている用例の引用である。この一点だけでも批判して余りあるところであるが、今回、問題にするのはこのような学統における研究の方法論的な是非ではない。(この点に関しては「方法論(別稿)」にて詳しく扱う。)

問題は「イタリア南部の方言(Arbëresh)」として著者がマリア・テレサ・グァスティの研究論文から引用している言語のことである。あまりにも愚かしい誤りであるので、念のため筆者が著者本人に直接、確認したところ、やはり、「それ [=「Arbëresh」] はイタリア語の方言です」との返答であった。恐らく言語学者ならば、当該言語の例文や「Arbëresh」という言語名称から即、どのような言語であるかは判るはずであり、また、この著者自身の論文中の用例が殆どイタリア語なので、一瞥すれば少なくともイタリア語の方言ではないことは簡単に判るはずである。解答を出す前に次の記述を特にこの著者に読んでもらいたい。(この言語の用例が解釈でき、分析できるとの由。敢えてこの言語で書かれた説明を選択した。)

Arbëreshët e Italisë とは “Banorët e ngulimeve shqiptare që u vendosën në Italinë e Jugut në shek. XV e më pas” (X [oxi] / Bo [zhor] (1985:33b)) であり、*të folmet arbëreshe* に関してはジョヴァンニ・シュクルタイの記述説明を下に引用する。

“Ishuj gjuhësorë të shqipes në fshatrat arbëreshë të Italisë, si edhe të Greqisë, të themeluar para më se pesë shekujsh. Këto të folme bëjnë pjesë në përgjithësi në toskërishten. Një varg dukurish të të F. A. paraqesin përkime me labërishten e me çamërishten. Të tilla janë ndër të tjera, mungesa e fonemës y dhe përfaqësimi i saj nga i: di «dy», si «sy», ruajtja e bashkëtingëllores / në fjalë si: *golë* «gojë», *bilë* «bijë», val «vaj», ruajtja në disa të folme e grupeve *kl, gl: klaj* «qaj», *gluha* «gjuha».” (Sh [kurtaj] (1985:1091a))

これらの記述から判る通り、「Arbëresh」とは南イタリアで話されているアルバニア語なのである！即ち、ジェルジ・カストリオティ・スクンデルベウ Gjergj Kastrioti Skënderbeu (イタリア語ではスカンデルベグ Giorgio Castriota Scanderbeg) の末裔達の話す言語である。アルバニア語は印欧語中で他に近い類縁関係の言語がなく、一言語一語族を形成する独自の言語であり、¹⁷⁾ この学会のテリトリである諸言語とは系統的には無関係である。(偶々、筆者は若い頃よりこの言語に関心があったばかりではなく、¹⁸⁾ 筆者の卒業論文や北村 (1991a) ; (2001a) においてこの言語を扱ったのは古い時代のものと考えられるラテン語からの借用語に満ち溢れているからである。)

不思議にも、この著者が引用したグァスティ論文には、その第一頁にて “Arbëresh (Albanian dialects spoken in southern Italy)” (Guasti (1996:209)) と明確な説明がある。この辺りがこの著者の論文を「胡散に思わ」^{18 bis)} ざるを得ない所以である。

当時、この学会の査読者や編集委員は何をしていたのであろうか。これでは「ピア・レビュー」自体が無意味かつ無効ではないだろうか。(この学会では研究大会にて発表した後に投稿することになっているので、発表に臨席した会員の責任も重い。) 当該学会内で “body of

knowledge”を一度、検証したほうが良いのかもしれない。

我々、人文学に携わる者も自然科学の分野で先発したように「評価」される時代であるが、このような学界に他人を評価する資格が果たしてあるのだろうか甚だ疑問である。この点に關しては後に再び採り上げることにする。

筆者が「人文学の終焉」という副題を添えて研究発表を行った1998年当時は、業者による論文の「バック売り」の広告案内がよく届いていた。「英語と文化」とか「高等教育における外国語としての英語教育」、「オーストラリアにおける言語の状況」というように主題別に数編から十数編の既刊論文（著者名は広告では表示されていない）を纏めたものを然るべき料金を取って研究者に売りつける商売のようである。想像するに、購入した研究者はこれらの論文を読んで、自分の論文を執筆したり、教育現場で使用したりするのであろう。自分で参考資料となる文献等を探すことに人文学研究の醍醐味があると筆者は考えるので、これは実に勿体無いことである。

しかし、近年はこのような広告が来ないため、大学教師がこのような商売を相手にしなかったため売れ行きがあまり芳しくなかったのであろうと考えていたが、ある話に接した時に、思いを少し改めた。即ち、大学院を重点化した一部の大学を除いて、もはや大学では研究（特に人文学系の研究）をする必要がなくなってしまうからではあるまいかという恐怖にも似た思いが強くなってきた。（この「ある話」とは、毎回のようには或る大学の紀要に論考を載せてい

- 17) ここで、アルバニア語研究において重要な基本文献となっている著作もある比較言語学の泰斗、ホルガ・ベザスンからアルバニア語に関するこれらの事情を説明してもらうことにする。

“Det stærkt avsløbne, av låneord vrimlende albanesiske sprog, hvis kilder for en stor del var vanskelige at få fat på, spiller i det 19. århundredes første del ingen rolle i sprogforskningen. Det, som man i sprogsammenligningens begyndelse først og fremmest havde brug for, vidnesbyrd om det oprindelige, fællesindoeuropæiske böjningssystem, kunde så godt som slet ikke findes i albanesisk. De gamle endelser er her så stærkt forandrede, at de først røber deres oprindelse, når de undersøges med en fremskredne sprogforsknings midler. Albanesisk har endogså endnu i det 19. årh. været anset for et fremmed, ikke-indoeuropæisk sprog. [...] Schleicher går i sit skrift Die Sprachen Europas (1850) ret udførligt ind på albanesisk med benyttelse av nyere materiale og hævder ligeledes, at sproget er indoeuropæisk. [...] 1854 udgav Bopp en avhandling om albanesisk, hvori han for så vidt nåede et skridt ud over Rask og Schleicher, som han antager, at albanesisk ikke står i nærmere forhold til nogen anden indoeuropæisk sprogklasse (altså heller ikke til græsk og latin).” (Pedersen(1924a: 63-65))

- 18) 筆者が高校生生の時に読んで感銘した泉井（1968）は筆者の専門領域からの偏向を排除してもなお、日本語で書かれた言語学文献の最高峰に位置付けられると言える。この書にはアルバニア語にも記述が充てられており（泉井（1968:87-100））、その前の導入の部分（泉井（1968: 84））では Arbëresh も登場するのである。

泉井（1968）はその体裁からすれば、「岩波新書」という大衆向けの啓蒙書である。しかし、この内容を理解しうる、そして泉井久之助や蛭沼寿雄といったヨーロッパの古代語を研究する秀逸な学者に比肩しうる言語学者は今や極、少数になってしまった。筆者が人文学の没落を憂慮する理由の一端がここにもある。

第2回日本ケルト学会議（1980年4月1日～2日）にて晩年の泉井久之助に筆者がアルバニア語に関して個人的に質問をした折、「一つの言語を学ぶならば、シンタクスの深いところまで勉強しなければなりません」と諭すような囁き声で碩学は語った。「広く浅く知っているのが学者である」と説く江上波夫とは異なり、「学者は広く深く学ばなければならない」と後年、筆者が考える時に必ず脳裏に浮かぶ大言語学者の言葉である。

- 18 bis) 「ウサンニヨモフ」。“Vfanni vomô. Ter duuida.”（『日葡辞書』（1603-04=1960: fol. 391r））キリシタン研究において「ローマ字本」と称される一連の諸版では原資料のラテン文字で書かれた日本語の中で漢語と思しき箇所は何れの漢字を充当するかという翻字の問題が重要であり、研究者を悩ませる。ここは『邦訳日葡辞書』の「胡散に思ふ」（土井/森田/長南（編訳）（1980: 733b））が妥当であろう。

因に、この *Vocabulario da lingoa de Iapam* の日本語訳は編者の一人が1989年に刊行したその『索引』に言うような「邦訳「本」」ではない。また、『索引』の所収欄を示す「l（左欄）」及び「r（右欄）」も全く頂けない。文献学的知見が要求される所以である。

た某教員が会議を欠席しがちになった際に部局長から「最近、姿が見えなくなった」と言われたという話である。論文を書いて発表することでは大学教師としての「存在証明」はできない時代になったのであろう。）

人文学だけに限ったことではないが、我々が如何に知の「アマチュア」たらんと欲しても、大学より職俸を得る以上は研究や教育を遂行する上で多くの掣肘が加わるのが実情である。よって、人文学を始めとして、あらゆる学問を衰退させないためにも大学における研究・教育の環境を修整しなければならない。

大学を巡る状況も様変わりした。学内の学生への教育のみならず将来に向けての学生確保も兼ねた高校への「出前授業」¹⁹⁾ や公開講座等の学外への教育への手厚い配慮も必要となる。人材育成は大学の重要な使命であり、筆者もこの点に関しては異存は全く無い。しかし、過度なまで学生の希望を全て無批判に受け止めるような状態の全てが、「教育」であるとは筆者には思えない。「ある国を滅ぼしたいのならば、その国の若者の希望を全て叶えるようにすればよい」とは、当に言い得て妙である。もし仮に自分が国を滅ぼすために教育しているとすれば、これ以上の虚しいことはない。

事務的な処理作業も増え続けるのである。科学研究費補助金を運よく得て、書籍を購入しても登録のために重たい本（時には、百科事典のように何十冊にのぼることもある）を抱えて図書館を往復するのは今や教員本人の責務になってしまった。研究どころではない状況が生まれているのである。「衛生管理」と称して事務員が研究室前に置いてある荷物を写真に撮ったり、各教員の研究室内部を巡視するような時間があるならば、研究や教育の知的源泉である書籍の運搬程度のごとは手助けしてほしいと思うのは今となっては法外な望みなのであろう。当に Frailty, thy name is “man of science” である。

また、「実学」的と考えられている研究が人文学系の研究に優先されるようになってきていることも人文学の衰微に拍車を掛けている。人文学や基礎科学のように直には際立った効果が見えないような分野の重要さは本稿で主張するまでもなく常に余人によって力説されている。²⁰⁾ 人文学研究の要である文献費（書籍代）が個人研究費は別として多くのプロジェクト費

19) 大学の授業がやっとラーメンやカツ丼と等価値まで昇格したと考えるべきか、将又、ラーメンやカツ丼のようなものと同程度になってしまったとすべきかは各人の判断に委ねるとする。兎に角、「出前」しなければならないので、手には書類鞆の代わりに岡持を持つことになりそうである。

1999年11月に県内の遣り手の高校長が文部省（当時）からか県からかは失念したが、予算を付けてもらい県内の複数の大学・学部と中央の複数の大学から教師を呼び、各自の研究を高校生に披露させるというプロジェクトを企画し、筆者も専門が「言語学」ということで希まれたため、自分の専門分野について高校生に話をしたことがある。その時の呼称は「大学ガイダンス」であった。講義資料の他にカリキュラムや福利厚生、就職関係、課外活動、教師の研究分野等を纏めた資料集を作成して臨んだにも拘らず、時代的にあまりにも早い開催であったため、筆者の体験はその後の大学・学部の広報活動には活かされなかった。残念ながら、日本流の「ノウハウ」の浪費を垣間見た思いである。筆者が力説する人文学の没落に対処する方法の一つは当にこの「ノウハウ」（知見）の蓄積と活用なのである。

20) ジョン・マイケル・ザイマンは科学技術研究フォーラムでの公開講演において、（ザイマン（2002））テクノ・サイエンスのような競争市場の効率性に基づく「道具的な」instrumental 科学に対して、政府や企業のみならず、より多元的な社会における「非道具的な」non-instrumental 科学を掲げ、その機能の一つとして「世界観」world pictures を作り出すことを挙げている。「世界観」の果たす機能とは、科学が影響力のある信頼できる知識によって社会を豊かにするということであり、一例として次のように述べている。「最近話題になっている気候変動ですが、そのメカニズムが理解できるのも、百年以上前のアレニウスというスウェーデンの化学者の何の役にも立たないような純粋の研究がもとになっているのです。」偉大なる化学者、スヴァンテ・アウグスト・アレニウス——地球温暖化と二酸化炭素との関連性に異を唱える研究者がいないわけではないが、それにしても今から100年以上前の1896年のことである！

では全く算定されなくなったのは、今に始まることではない。人文学は内にも外にも没落の危険性を孕んでいるのである。²¹⁾

世の中と同じく、現在の大学は次第に萎縮しつつある、などと書けば、大いに異論が出るであろう。世の中にも、大学にもこの昨今の状況を好ましく思い、この世の春を謳歌している人々も多いのであろうから。ただ、今後、社会や大学が萎縮してしまった場合にその閉塞感から開放することができるのが人文学的な知見の数々であらうと筆者は考えている。人文学は人間性に深く根差した学問であるからである。社会の現状に対する筆者の否定的な意見に対し、「世の中が変わったのだから仕方が無い」と反論なのか慰撫なのか判別できない口調でよく人に論される。現在の社会にも、そしてその社会を教導すべき大学にも批判する力、抵抗する力が以前に比べ劣っているような気がしてならない。²²⁾

2004年4月の国立大学法人化に際して、どれだけ多くの国立大学の幹部が「市場原理・競争原理」の導入を声高に叫んだことか。或る大学では「学生は客であり、授業は商品である」と位置付け、また別の大学の学長は「やるしかない」と言いつつ、競争的資金の獲得を目指したという。さらに殆ど全ての大学では民間企業の経営感覚に学ぶことが奨励された。²³⁾

しかし、これは教育もビジネスも知らない人々の夢にすぎない。商売とは社員や家族を抱えての命懸けの営為である。「神様」のような絶対的存在である顧客が「黒」を「白」と言えども、商売する側は「然り」と首肯せざるを得ない、これが商売である。気儘な顧客のいくら

21) 不愉快な金銭面の話が続いたが、人件費を別にすれば、本当に良質な教育自体にはそれほど資金はかからないのかもしれないという思いが最近、頗る強くなってきた。一見、高級な授業に見せ掛ける高価な機器や教材なしでも、情熱を持って真理を語る話し手と真剣に耳を傾ける聞き手がいるだけで、そこは立派な教育の場となるのである。

第二次世界大戦敗戦直後の時代の話であるが、「敗戦後まもない昭和20年代は、あまり就職先もなかった。我々は知識欲に燃えて大学に入り、気に入った先生の授業を受けてはすっかり洗脳されて、その先生の授業に熱中した。文字までその先生の文字を真似た。そうした先生に会えた人は、もっとも幸せな学生生活を送ったわけである。」(長澤 (2003:100b)) とのことである。自分が信じてきた学問で学生に幸せを与えることができる教師、「サウイフモノニワタシハナリタイ」。

22) 某公立大学の存廃を巡る中で開催された集会(2004年2月28日)への参加者による感想が集会を企画した会のサイトからの抜粋という形で「ニュース・レター」として筆者の元にも配信されてきたことがある。集会に参加した当該大学の学生の次の言葉は筆者にとって生涯、忘れられないものとなった。即ち、「私たちは「牛丼」以下か」という嘆きである。当時、牛肉問題で牛丼が某外食店のメニューから無くなるというので、マスコミを挙げて連日、この問題が報道されていたのに反し、当の公立大学の存廃に関しては牛丼報道の比ではなかったのである。当に国立大学法人化の際に大学人が経験した世論の無関心さと同一である。我々、大学人が社会と隔絶してきた報いなのであろう。それにしても1~2年も経てば、日本の大学関係者はこの集会のことを忘れて何事も無かったかのような日々に戻る——嗚呼、これが日本の知性なのであろうか。

因みに、この公立大学の存廃を巡る攻防に関して、廃止予定側の立場から総括したものが茂木(2005)である。但し、筆者としては、反対側の立場や同じ立場でも異なる視点からの意見も聞きたいと思うが、事の是非は何れ何十年か経れば歴史が教えてくれるであろう。但し、皆がこの事件を記憶していればのことであるが。

23) これらの前提としてあるのが「遠山プラン」と称される文部科学大臣、遠山某の時代に文部科学省から発表された「大学(国立大学)の構造改革の方針」(2001年6月)である。周知の通り、これは国立大学(当時)の大胆な再編・統合、国立大学(同)への民間的発想の経営手法の導入、そして大学への第三者評価による競争原理の導入を掲げ、各大学に国際競争力を付けさせるための指針(文部科学省(2001))で、その後の大学改革の基本方針となった。さすがに国際競争力を云々するだけあって、「タックスペイヤー」氏も登場するのである。行く末、この「プラン」が日本の教育に、社会の知的水準に、そして国家に及ぼす影響を「看殺」していきたい。“Paper and sticks and shovel and match / Why won't the news of the old world catch / And the fire in a temper start.” (Thomas (1968:23))

不当な要求にも最大限、努力して応えなければならない。利益が出なければ経営が行き詰るため、人間性よりも効率が優先されるのがビジネスの世界である。

教育は、嘗て教師が「聖職」²⁴⁾と呼ばれ、且つ教職にある者はそれに応えるべく不断の努力をしたことから判るように、崇高な使命を担っている。「教育は、人間と人間とが触れあうなかで愛情と理解と信頼に充ちた関係をつくり出しているときに最大の効果を発揮する」(末川(1975:14b))という末川博の言葉を俟つまでもなく、教育は人間性に満ち溢れた営為である。教育に関わるシステムを全て電子化して「人間の触れ合い」を求める場と言えるのかどうか甚だ疑問である。畢竟するに、教育者は人間をも包み込む「神」や「仏」のように超絶的でなければならないと筆者は信じている。「我々も人間だから」という言辭は教育者には相応しくない。

教育とビジネスとは相容れない営みであることは2007年5月に財務省が各々の国立大学に交付する運営費交付金の試算を財政制度等審議会に提示した時に痛切に思い知ることになった。試算の根拠の正当性に関する議論は一先ず置くとして、²⁵⁾3年前には挙って市場原理に同調していた各大学が経営破綻を目前にすると今度は「教育に市場原理は不適切」と最初から判り切っていたことを唱和するのである。しかし、ビジネスとしての教育の道を選択したのであるから結果が出なければ、その部門は閉鎖され、経営責任が問われるのは必然である。——悲しいことにビジネスは非情なのである。宇沢弘文は「大学が、法人資本主義体制のなかにおける一つの制度として存在し、維持されている以上、大学の運営もまた、利潤追求という、資本主義の至上目的の支配下におかれるという危険を常にもっている」(宇沢(2000:150))と指摘し、ソーステイン(彼が幼時に親しんだノルウェー語式ではトルスタイン)・ヴェブレンの大学論を基に効率主義とは無縁の大学像を追求している。²⁶⁾宇沢の論ずる研究と教育の関係は現在の状況では一見、時代錯誤的に映るかもしれない。しかし、大学教師は自身が研究した内容を教育に反映させるのであり、研究抜きの教育は考えられないことを世間は忘れて去っている。これは専門教育のみならず、リベラル・アーツの諸教育においても必須の要件である。大学内部でも諸々の状況から判断すると教育が大学教師にとって第一の本務とされるようになった。学生へ

24) 15年程前に筆者が教育実習委員(当時)として「教育実習校訪問」を行っていた時の経験である。実習生受入れ校の校長と教育実習生である大学生と筆者の三人で談話していた際に校長と筆者が「聖職」という言葉を口にしたが、同席した大学生には理解不能であった。当時、既に「聖職」という言葉は死語となっていたのである。

25) 財務省試算に対抗して文部科学省は地元への経済効果を算出し、「競争原理」による成果主義に異を唱えた。(但し、同省が教育や研究のために命を賭して戦っているのかどうかは、一部の篤実な人物を除き、各大学の幹部が一連の大学改革において行動していることと「同じ胸」のようである。)

数字は切り取り方によって千変万化することは2005年2月に農林水産省が算出規準を「カロリーベース」から「金額ベース」に変更したことで、日本の食料自給率が「2003年度」では40パーセントになるところを70パーセントにまで引き上げたという事実からも判る。田園が将に蕪れんとする中で机欄にて国家戦略の重要な課題である食料自給率を一気に高めるとは、さすが博学才穎である隴西の李徴が甘んずるを潔しとしなかった〇吏だけのことはある。

26) 「アメリカの諸大学では、法人企業において支配的な基準を大学に持ち込もうとしている。知識が金銭的利益をどれだけもたらすか、という市場的基準が導入され、大学における研究者は、有用な知識をどれだけ生産したか、学生を何人教育したかという外的な基準にしたがって評価される。大学自体も、利潤最大化という企業的制約条件のもとで経営されることになる。[...] 法人資本主義の抑圧的、非民主主義的なヒエラルキーの論理が中枢を占めるようになり、自由な知識欲と職人気質は跡形もなく消え失せてしまうことになるであろうと、ヴェブレンは嘆いたのである。」(宇沢(2000:151-52)) ヴェブレンの大学論は20世紀初頭のものである。現在の日本における大学も米国の轍を行くのであるから、何も考えずに車は進むので楽なものであろう。但し、轍からは逃れられないので、行く手に障害物があっても決して避けることはできないことを肝に銘ずるべきである。

の教育は大学教師にとって重要な責務の一つであるので、これはこれで宜しい。しかし、教師自身が研究した成果ではなくて、何を学生に教えればよいのか？ごく一部の皮相的なエリート大学教師が作製した教科書を他の教師が使わせてもらうような大学の営みを国家も大学当局も国民も真に希望しているのであろうか。²⁷⁾これでは人文学は疎か全ての学問が没落するのも当然である。「大学教師は南方熊楠を育てた鳥山啓の如くあらんと欲するのと同時に、南方熊楠たるべし」と筆者は考える。²⁸⁾

現在の社会は市場原理による効率至上主義のため人心が加速度的に壊れていくように思われる。また、教育界にもこの原理を導入することによって取り返しのつかないような弊害が生じている。若者の心が崩壊していくのを阻止するために効率主義や拝金主義を廃し、人間性を回復しなければならない。ここでは人文学から効率至上主義を駆逐する一助として科学者の倫理規範、或は学術的精神である「マートン規範」を人文学に照らし合わせて考察してみたい。

ロバート・キング・マートンは「科学と民主的社会構造」(マートン (1961:503-13))において普遍主義、公有性、利害の超越、系統的な懐疑主義という近代科学のエートスを形成する四つの「制度的至上命令」を挙げた。マートンの言う科学のエートスとは「科学者を拘束すると考えられている価値と規範の複合体であって、感情に色どられたもの」であり、「科学的良心[...]をつくり上げる」ものである。(マートン (1961:504b-505a))この論文が最初に執筆されたのは1942年であり、ナツィ政権下のドイツにおける科学者の暴発も米国のマンハタン計画も全容は疎か、その悲劇性も未だ明らかになっていない時期である。しかし、第二次世界大戦という状況下で科学技術が国家的権力により戦争に利用されていく過程で、しかも各国の殆ど全てと言

27) ジョン・マイケル・ザイマンによると、現在、進捗しつつある新しい「研究開発体制」‘R&D’ (research and development) system において学部教育と研究を分離することは「成長の限界」limits to growth を迎えた科学が「定常状態」steady state へ移行する時の免れえない結果であり、科学界における新制度への移行の極めて重要な一面であるとしている。(Ziman (1994:163-65))

その伝でいくと、日本の大学においても研究開発を支えるヒエラルキの頂点に位置する教師と、ヒエラルキの中位や低位を担う教師とが分離されることになり、現に、乖離しつつある(或は、乖離し終えた)のである。人文学がこのような繋縛から開放されるためには研究プロジェクトのような離散と集合を繰り返すような研究ではなく、本来の地道かつ着実な研究に回帰して、怠りなく(これが従来、欠けていたのであるが)邁進すべきである。

28) 十年程前に他大学の教師が「最近では学生が大学院に進まなくなって、(即ち、将来的に大学教師になろうとする者がいなくなって)困っている」と嘆いていた。「効率」という観点からすれば、大学教師ほど割りに合わない商売はない。寝食を忘れて研究に没頭し、研究費獲得のために奔走し、近年は小中高校の教師と同じように学生を生活面まで指導し、好景気とは無縁の一定の収入で、不況になれば、民間企業が苦しんでいるのに怪しからんと後ろ指を指され、地域貢献では...これでは成り手が無いのも無理からぬことである。

しかし、我々は研究をして、その成果を教育する喜びに満たされて満足しているのであるが、その喜びすらも奪い去るような教育行政の在り方に大いなる疑問を感じる。殆ど全ての大学教師に恰も機械のように、同一の仕事をさせて、独創的な研究を期待する方が筋違いである。これでは日本の学問の将来は見えていない。しかし、今後、大学教師として管理者側から求められる人物像は、アカデミック・ピラミドの頂点“top of the academic pyramid” (Ziman (1994:163))にある少数の場合を除いて、全身全霊を教育に没入し、定員削減で少なくなった事務員を補うかのように事務処理能力を身につけ(現に「財務諸表」が理解できるようになればと大学幹部が訓導している)、それでも尚且つ余裕があれば研究にも手を出してみる——というものになるであろう。ザイマンは言う、“There is no escape from a situation where only a minority of all university teachers will be in a position to do research and supervise postgraduate work, while the remainder will be expected to put all their efforts into undergraduate teaching and other activities that could not be described as advanced research.” (Ziman (1994:164)) 今後、大学教師という職業はそれほどの特殊技能は必要とされなくなるのであろう。来たらん、いざ、若人よ!

える国民から科学の戦争への寄与が期待される中で、²⁹⁾ マートンは科学者の良心に基き科学者の倫理規範を示し、拡大しつつある反主知主義に対抗したのである。

しかし、科学者の理想とは逆に現在の科学はジョン・マイクル・ザイマンが『縛られたプロメテウス』において PLACE と略称した “Proprietary, Local, Authoritarian, Commissioned and Expert work” の原則 (Ziman (1994:178)) によって好むと好まざるとに拘らず、搦め捕られているのが実情である。ザイマンはマートン規範を私的で個人的なエートスであるとし、現在の法人的な研究開発とは矛盾するとした。しかし、彼は社会から及ぼされる外的な力と科学に本質的に備わっている内的な圧力とを互いに戦わせて、その混乱を目の当たりにしながら生きながらえることを学ぶのが最善と考えており、いくつかの寛大な基準を研究組織に求めている。この中で筆者も「分化した専門的知識の尊重」(Ziman (1994: 276)) という点に関して同調することができる。³⁰⁾

マートン規範は科学者としてあるべき理想を示したものであり、ザイマンの PLACE は科学者共同体の避けられない現状を分析したものであるので両者を比較することはできない。問題はより複雑であろうが、ここでは極端に単純化して考えると、科学者のエートスがマートン規範から PLACE に移行すると捉えるのではなく、科学に携わる者にとっての理念としてマート

29) どこの国民も無責任で、眼前の利益ばかり追求するのが常であり、敗戦のような重大問題が国家に発生すると指導者達に全ての責任を転嫁するのである。しかし、指導者だけで戦争が遂行できないことは第一次世界大戦の末期に各国兵士の厭戦的雰囲気が戦争終結の一助になったことから理解できる。第二次世界大戦において日本が満州(当時)へ侵攻した時に日本国民が、そして第一次世界大戦においてヨーロッパ諸国の国民が当該戦争を支持したことをチョムスキーは指摘している。(チョムスキー (2005:55))

一連の大学問題においても国民は教育の行く末も判らずに、効率化を推進する国家に同調し、教育機関を企業と同列に置いてしまった。しかし、教育者自身も「軀を全うし妻子を保つ」ために徹底抗戦の道を選ぶことはしなかった。我々が反省すべき点があるとすれば、国民の理解を得るために「教育」とは如何なるものかを強く示せなかったことであろう。特に、自由な研究が保証されていた大学人が国民を教導できなかったことが責められて然るべきである。

30) ザイマンの一連の著作における「アカデミック科学」のモデルをまとめたものとして三宅菴の論考がある。三宅が言うようにザイマンの「メッセージ」_[ママ]が『縛られたプロメテウス』では「十分に伝わってこない」(三宅 (2004:24a)) のが残念である。ロバート・キャパではないが、*Slightly out of Focus* なのである。

31) ザイマン (1994) の標題はアイスキュロス作とされるギリシャ悲劇『縛られたプロメテウス』*Προμηθεύς Δεσμώτης* から採られており、現在の研究者が経営的発想の新しい研究開発体制に縛られていることを単純に表現しているだけではなく、この悲劇に準えて極めて深い意義を織り込んでいる。

至高神、ゼウスの不正義はオーケアノスの娘たちによる舞唱団

(「新規につくった掟をもってゼウスさまが、無法な力をおふるいになり」(アイスキュロス (5th cent. BC=1964:9b)。以下、ページ数のみ))

及びプロメテウス自身

(「私も知ってる、ゼウスの心はあらあらしく、正義を自分の気儘にしてる」(p.10a))

により弾劾されるが、プロメテウスの方も人間を助けたために

(「あらゆる技術(たくみ)を人間に教え、大層な便利を授けることだったゆえ」(p.8b); 「人間のもつ技術(わざ)(文化)はすべてプロメテウスの贈物だと思ったがいい」(p.15a))

ゼウスから厳しい罰を受けたのである。

(「この苦悩はいったいつ、どのように、終りをつけるはずなのか」(p.8b))

ゼウスを科学界の管理者、プロメテウスを研究者と看做せば、ザイマンによって巧みに仕組まれた構図が理解できる。ヘーパイストス、イーオー、ヘルメース等の他の登場人物がそれぞれ現在の何に比せられるかを考えても興味深いところである。「不可避(アドラステイア)の女神の前には頭を下げるのが賢い人ですわ」(p.21b)と舞唱団から言われたプロメテウスが「崇め敬い、へつらうがよい、いつも権力を執る者に対しては。だが、私にとって、ゼウスなどでんで眼中にはないのだ」(*ibid.*)と抗う件はザイマン始め科学研究者達の心情を代弁しているように思えてならない。

ン規範は今なお、生き続けていると考えたい。³¹⁾「(新制度 new regime の下での) 研究開発体制」R&D (research and development) system と「有効利用度 (原義では、如何に搾り取れるかということ)」exploitability と「一見、無縁であるかのような人文学は敢えて、これを逆手にとって、マートン型エートスに立ち返ることができるし、そうすべきである。即ち、「公有性」及び「利害の超越、つまり公平無私性」への回帰が絶対的に必要となるのである。³²⁾ この点では過去にメセナの学者が人文学領域に多く存在していたことから、人文学にはその伝統の残滓が未だ僅かながら存しているため、これらの学問的精神の復活に有利に働くと考えられる。ザイマンは“There is no way back to the traditional way of managing the business of research” (Ziman (1994:250)) と言う。しかし、これは自然科学の現状であり、人文学は利害得失が生ずる「ビジネス」に手を染めてはいけない。「自然科学の猿真似」(ソーカル/ブリクモン (2000:249-50)) をすることによって学問的及び精神的に失うものの大きさを考えれば、PLACE を遠ざけて、敢えてマートン型エートスに回帰すべきである。³³⁾ 自然科学の分野では不可能な逆行が人文学では今ならば可能である。そして戻るべきは経験的に19世紀の後半から20世紀前半の人文学の黄金期におけるような純粋な知的廉潔さ^{33 bis)} にあると筆者は考える。

誤解のないようにここで強調しておきたいのは筆者は現在の大学において改革が決して不要であるとは全く考えていないことである。それよりも寧ろ、旧来の多々ある弊害は積極的に改めるべきであると過激なまでに考えている。しかし、教育に関わる事務的な能率を良くしたり、研究に際して効率を良くしたりすることを改革と混同してはならない。これらは単なる外側の器を整えただけである。大学改革は決して皮相的なヒューマンイズムや「仲良しクラブ」的な迎合によるものではなく、ましてや「知の芸能化」(佐伯 (2006:33)) を許すことでもない。改革理念の根幹を成すのは深い「人間性」と教育者としての「禁欲的な精神」であることが肝要である。

日本における科学者団体の機関誌 (2006年9月刊) の巻頭言に某大学教師が書いた「とくに国立大学は〈學〉の場としては窒息死しつつある」という冒頭句には筆者も同感であるが、この後に続く内容が全く宜しくない。つまり、「大いなる〈學〉としての大学は、「有用性」や「勤勉」やビジー-ネス [著者の造語。「忙しくしていること (busy-ness)]] とは無縁の「大いなる蕩尽」(ジョルジュ・パタイユ) の時空なのである」と著者は言う。未だにこのような主張をする人文学系の大学人がいること自体が堪らなく悲しい。自身の研究が「有用」でないとはいながら研究している者はいない。「何れ役に立つ時機が来る」ことを信じて研鑽を積んでい

32) 現在では「知的財産」という発想がマートン型エートスよりも PLACE の諸原則の獲得を目指す科学者の「隅の親石」となっているが、(Ziman (1994:182)) 少なくとも人文学では「(自分の) 知的 (財産) に対する科学者の権利の主張は、世間に認められ尊重されるということに止めた (マートン (1961:509b)) 方が良策と考える。即ち、plutocracy の放棄を高らかに謳い上げるのである。

33) 1848年1月24日にサクラメント川支流、アメリカ川で金を発見してゴウルト・ラシュの嚆矢を放ったジェイムズ・ウィルソン・マーシャルは「飲んだくれて、無一文で死んだ」(大島 (1981:171)) という。California dream は所詮、夢にすぎなかったのである。

33 bis) 大学教師の「知的廉潔さ」とは大学教育に携わる者の根本的な営為の基幹となるもので、それは独自の研究を行い、その成果を発表し自身の教育に反映させることが基本であると筆者は考える。人文科学の「黄金時代」にフゴ・エルンスト・マリア・シュハルトは約770編、ヴィルヘルム・マイエル・リュプケは約750編の論著を生涯に公刊しており、筆者もこれらの碩学に少しでも肖りたいと常に念じている。

植草甚一が多作なミステリ作家、ジョン・クリシによる執筆に関する助言を紹介しているので、研究論文と推理小説とは些か異なるが、筆者も同感したいくつかをここに記しておく。一、「考えこまないで、ぶつかってしまうのだ」、一、「から威張りするより、[才能を] 一生懸命に育てることにしよう。そんな気持から自信がってくる」、一「完成したら [...] 次の作品に着手することだ」、usw. (植草 (1972:270-74)) 「はくがなぜ気に入ったか教えてあげよう」という J・J の声がかえてくるかのようである。

るのである。過去の反省から筆者が考える「研究者」とは、徹底的に人間性を追究し、平和を希求し、勤勉でなければならない。そしてあらゆる意味での「自由」を守る砦とならなければならないのである。知性を無為に湯水の如く浪費する時代は二度と繰り返してはならない過去の過ちなのである。

些か長く大学問題を学問と絡めて論じた。繰り返しになるが、我々が知の「アマチュア」たらんと欲しても、大学より職俸を得る以上は研究や教育を遂行する上で多くの掣肘が加わるのが実情である。人文学だけに限らず、あらゆる学問を衰退させないためにも大学における研究・教育の環境を修整しなければならないことは論を俟たない。

しかし、究極的には人文学の没落を救い得るのは決して予算や改革などではなく、この道に携わる者自身の知的廉潔さであり、これさえ備えていれば如何なる時代においても、如何なる環境においても学界や大学の嘗ての輝きは甦りうるものと信じている。³⁴⁾ 研究と教育という「ヤヌスの面」を徹底的に具備することにより人文学のみならず、あらゆる学問は滅息の危機から免れることができるのである。「教えるということは希望を語ること」「Enseigner c'est dire espérance」というルイ・アラゴンの詩を教示してくれたのは自らこの言葉を実践した我が師、新村猛であった。クレルモンで大学を再開した人々のように人文学が苦難の時代を乗り越えることができることを切に希うのと共に、師、新村のような「至純にして剛直の人」（長谷川（1992））の再来を待ち望むものである。

学術と銜学の狭間で

字句を細密に拘る学風を銜学的とし、たとえ弄ぶにしても、理論が談論風発することを学術的とする観点は、最早、人文学を没落から救うために廃棄したほうがよい。一字一句に拘ってこそ、緻密な議論がなされるのであると筆者は信じる。

「人文学方法論（別稿）」で述べる人文学の基本的な研究原理には研究の理念のような高邁なものから文献操作や書誌記述のような具体的なものまで様々な階梯がある。後者のような実際の要件では銜学的になりやすい傾向があり、無意味に守旧するだけでは学問も自ずと凋落するだけである。そのため、各段階によって程度は異なるが、自身の研究に関する行為が常に意味付けられねばならないと筆者は考えている。

筆者が始めて「論文」（北村（1979））を書いた際に当惑したのは、論文の内容を別にすれば、注記の方法や参考文献一覧の纏め方であった。そのため書店に赴き、論文を執筆する初心者のために書かれた入門書を店頭にて選び、購入した。この書物にて参考文献の書誌記述の方法を学び、その際に英語のみならず、ドイツ語やロシア語の略語等の書誌学的用語も学んだ。昭和

34) 宇沢弘文によると第二次世界大戦後に旧制高校の建物が連合国の進駐軍に接収されそうになった時、校長の安倍能成が次のようにGHQの将校相手に言ったという。「この一高はリベラルアーツのカレッジである。リベラルアーツのカレッジは、専門を問わずに人類が残した遺産である。学問や芸術、技術などをただひたすら吸収して、一人ひとりの生徒の人格形成を図るとともに、その貴重な遺産を次世代に伝えるという、聖なる仕事をしている場である。占領という俗なる目的には使わせない。」（宇沢（2007:5b-6a））宇沢は回顧する。「私たちは、安倍先生が撃たれるのではないかと思ったほどです。ところが、その占領軍の将校団は黙って帰って行ったのです。」（宇沢（2007:6a））

1991年に大学設置基準等の大綱化が打ち出され、その後、各大学において教養部が解体していく中でこのような発言をする者、そしてその発言を受け止める者がほとんど存在しなかったのは恐らく人文学を始めとする諸学問が没落（或は変革）しかけていたことの傍証であろう。

52 [1977] 年に初版が発行され、筆者が使用した第4刷は昭和53 [1978] 年刊行のものであった。このような実務的手引書の出現は学芸の成熟に伴う時代の要請であったのかもしれない。

その入門書には「改訂版、第二版のような場合には、rev. ed. とか 2nd ed. というように扉頁に書いてあるものを記入します」(斉藤 (1977:114)) と欧文文献の記述に関する解説ながら、刊行物の版次を示すことを明確に要求している。(邦語文献に関して同様の記述がないのは残念である。) 或る書籍のどの版を使用するのかという問題は人文学においては極めて重要な問題であるにも拘らず現在では殆どの研究者が等閑視しているのが実情である。試しに、本邦における知の拠点と言っても過言ではない某大学某学部から1994年に初版が出版された演習テキスト(筆者が使用したのは2002年の35刷) 所収の論文執筆のための手引「論文の作法」を見ても版次を書誌事項として記述する旨の指導は全くない。(ただ、記述例として挙げた参考文献一覧の中で欧語文献1冊に“5th ed.”の記述があるが、本文中で明示しなければこの手引を利用する学生等には伝わらない。) 書物の版次に注意することは一昔前は研究者として常識であった。(筆者が履修した学部2年次の一般教養科目の中で文学を専門とするドイツ語教師は版次を選ぶことの重要性を授業の中で教えてくれたことを思い出す。³⁵⁾ 出来る限り良質な版を厳選して使用することは研究者の責務であると筆者は考える。

本稿の引用資料一覧における記述法から判るとおり、書誌記述からどのような情報を提供するかが課題であり、凝り固まった図書館学的な文献記述に決して固執しない筆者なりの工夫が凝らしてある。書籍の版次にしてもただ単に初版のみ、或は逆に最新版のみを記すのではなく、優れた版が判るような、或は全版次を網羅するような記述法を展開した。参考文献や引用資料の一覧の中に筆者の学問に対する理念あるいは世界観が発現するようにしたものである。

詳細な注解の故に翻訳の方が原典より重要な場合もあろうし、付した解説が優れているため復刻版に言及せざるを得ない場合もあろう。辞典や事典などで執筆者の能力の差により最新の版よりも旧版の方が重要な場合も多々ある。資料を厳選することは学問の無意味な伝統や空疎な慣習を過度に守り、継承することとは全く異なり、人文学の重要な基本的姿勢なのである。

人文学研究の基本の一つであるこのような文献操作を看過するわけにはいかないという一例を筆者の専門である言語学・音声学の領域から示しておきたい。

フェルディナン・モンジャン・ドゥ・ソシュル³⁶⁾ のジュネヴ大学における一般言語学に関する講義は『一般言語学の講義』(Saussure (1916)) として刊行されている。しかし、これは周知の通りこの講義を聴講していなかった二人の弟子シャルル・パイイとアルベル・セシュエがソ

35) この上級ドイツ語クラスにおけるテキストはハインリヒ・フォン・クライストであったが、当時としても誰も使わないようなフラクトゥア(ドイツ文字)で書かれていたため、若かった当時は時代錯誤的な印象を持っていた。しかしその後、ロマニスト、ハインリヒ・モルフの著作や、今回、本導論の冒頭で引用したマクス・ヴェバを読むに際して難儀しなかったことでその有難さがよく判った。今にして思えば、人文学の基本を専門科目以外の教師からも教えてもらっていたのである。アルテス・リベラレス侮る勿れ。

36) ソシュルは20世紀において言語研究の「パラダイム・シフト」を成し遂げた2名の言語学者のうちの一人で、他の一人はノーム・チョムスキである。そして二人の名前を知らない知識人はいないほどの大きな存在であり、彼らの思想は言語学の枠を遥かに超えてあらゆる分野に広がっている。但し、ソシュルはそれとは知らずに言語学に厭苦して没したことを忘れてはならない。

チョムスキ革命以後、半世紀を経た今日、夥しい言語理論の群れを傍観し、この50年間、言語学において「drastic (「下剤」関連でよく使われる語) なパラダイム・シフト」は生じなかったのではないだろうか。と筆者は感じる。50年間に言語理論の変転の行き着く所が「脳科学」に委ねることだったとすれば、余りにもお粗末である。ソシュルとチョムスキによる変革が drastic な変化だけに爽快感と共に疲労感が我々に残るのであろうか。

シュルの没後、3年を経て編纂したものである。

その標題ページにはこれら3名以外に協力者としてアルベル・リドラングエの名が見られるが、バイイとセシュエによる1915年7月の年月が付された「初版のはしがき」には“Pour les deux premiers cours nous avons recouru à la collaboration de M. A. Riedlinger, un des disciples qui ont suivi la pensée du maître avec le plus d'intérêt ; son travail sur ce point nous a été très utile.” (Saussure (1916:8))とあり、やや距離をおいた存在であり、彼の貢献度が編纂者の2名と他の受講生との間に位置付けられているように思える。

同序文には聴講生とは別に“Nous exprimons aussi nos plus vifs remerciements à M. Jules Ronjat, l'éminent romaniste, qui a bien voulu revoir le manuscrit avant l'impression, et dont les avis nous ont été précieux.” (Saussure (1916:8))とジュル・アントワヌ・ロンジャへの謝辞が捧げられている。彼の「意見は貴重であった」と言うからにはどうもロンジャなしにソシュルは語り得ないようである。残念ながらソシュルに関する小さな某事典にロンジャの名前は見当たらないし、他のソシュル研究書においてもロンジャに関する詳細な記述は寡聞にして知らない。³⁷⁾

このようにソシュルの一般言語学に関する講義を活字にした現行流布版はバイイとセシュエが受講生のノウトを集めて編纂したものであり、リドラングエの協力やロンジャの助言によって成立している構成物なのである。

更に、内容に踏み込んでみることにする。ソシュルは言語学の種々の分野に多大な貢献をしているが、ここでは「バイイ=セシュエ流布版」にて“Introduction”の“Appendice”として収録されている“Principes de phonologie”における音声学の基本的原理に関して採り上げることにする。これは1906/07年度（具体的には1907年1月から7月）に行われた講義の中の一部である。

筆者も嘗て「音節境界」に関して纏める折にソシュル『講義』のバイイ=セシュエ流布版（以下、CLGと略）を使用したことがある。（北村（1987）ルスロ、パンコンチェッリ-カルツィア、ダニエル・ジョウンズやケニス・パイク等が音節境界や音節そのものを否定するのに対し、ソシュルは開口度の変化を以て音節境界を定義したのである。元々、肋間筋の拍動によって生じた呼気の単位である音節を定義することは難しく、更にその境界を決定することは極めて困難であり、このソシュルの定義も完全ではない。

音声学の領域でCLGを利用しようとして驚くのは「音声器官とその機能」の箇所に編纂者のバイイとセシュエによって次のように注記されていることである。“La description un peu sommaire de F. de Saussure a été complétée d'après le *Lehrbuch der Phonetik* de M. Jespersen, auquel nous avons aussi emprunté le principe d'après lequel les formules des phonèmes seront établies ci-dessous. Mais il s'agit là de questions de forme, de mise au point, et le lecteur ^[sic]³⁸⁾ se convaincra que ces changements n'altèrent nulle part la pensée de F. de S. (*Éd.*)” (Saussure (1916:68, n. 1)) 即ち、ソシュルのやや概略的な記述をイエスパスン（イエスペルセン）氏の『音声学の教程』によって補完

37) ロンジャの不朽の名著『現代プロヴァンス語諸方言の歴史文法』*Grammaire istorique des parlers provençaux modernes* (Ronjat (1930-41)) におけるロンジャ特有の表音式綴り字にカルロ・タリャヴィニ (Tagliavini (1972)) は必ず“sic!”を付す。しかし、この綴字法を誤りと捉えるのではなく、彼の（より正確には、彼らの）思想の顕現と理解しなければならない。北村（1997b:2, n.13）参照。

日本におけるソシュル研究の泰斗の一人によると、「ロンジャはジュネーヴ生まれのスイス人で、ソシュルが調べたフランコ・プロヴァンサル資料も一緒にまとめてロンジャ資料となっている」（2002年8月8日談）とのことである。さすがに第一人者としての述懐である。因に「フランコ・プロヴァンス語」に関しては北村（1990b）を参照。

38) 誤植は第2版 (Saussure (1922)) にて修正されている。

したというのである。この直前の注記 (Saussure (1916:67, n.1)) にこの『教程』は1913年刊の第2版であることが示されている。

ソシュルの講義内容だと思いきや、編集者 (バイイとセシュエ) によってイエスパasn (イエスペルセン) の叙述に部分的にすり替わっているかもしれないという危惧が生ずる。但し、どの箇所が本来のソシュルの理論でどの程度までイエスパasnの理論が侵出しているかという考証はソシュリアンに委ねたい。事件はライン川を越えて北欧に飛ぶことになる。小国ながら独自の学問的伝統を培ってきデンマークが生んだ大言語学者にして大音声学者イエンス・オト・ハリ・イエスパasn (イエスペルセン) の好著『音声学の教程』第2版の「性格」を深く知ることにより筆者が力説する文献学的操作の重要性が露になるのである。

この『音声学の教程』は音声学を研究する上で欠くべからざる必読文献であり、入門段階のみならず研究の最前線において現在でも優良な基本文献である。しかし、驚くこと勿れ、これは実は翻訳なのである！恐らくこの文献を利用する音声学者でイエスパasnの『教程』を翻訳と認識している者は皆無に近い。日本語で書かれた音声学書の中で最良の文献である服部四郎『音聲學』においても「ドイツ語の読める読者に是非お薦めしたい」として同書を挙げ、「初学者にわかり易いと同時に一般音聲學の最高水準を示すものである」(服部 (1954:200)) としているが、当然の如く原著として扱われている。新版を装った服部『音声学』でも記述は原刊書(『音聲學』)のままである。(服部 (1984:162))

イエスパasn『音声学の教程』の元版は1897年～99年にキョエブznハウンのシュボット出版から刊行された彼自身の手になる大部の『音声学』(Jespersen (1897-99))であり、(煩を避けてこの書の成立に関しては割愛する)このデンマーク語で書かれた隠れた名著は部分的に複数の別人によりドイツ語に翻訳され、一部は問題の『音声学の教程』(Jespersen (1904a))初版として、別の箇所は他のイエスパasnが著した論文と共に『音声学の基本問題』(Jespersen (1904b))として刊行されたのである。『音声学の基本問題』では1章と2章が『音声学』より採られ、ニコライ・アナスンとヘルマン・ダフィットセンにより翻訳されており、(Jespersen (1904b:III))『音声学の教程』初版はイエスパasn自身の序文にあるように『音声学』から「抜粋」したもので、(Jespersen (1904a:III))翻訳はヘルマン・ダフィットセンによっている。標題紙にも翻訳者ダフィットセンの名前が記録されており、何よりもイエスパasnが「最高の感謝」(Jespersen (1904a:IV))を表している。筆者が『音声学』と『音声学の教程』を校閲したところ、前者の“Fonetikkens specielle del” (Jespersen (1897-99:169ff))の部分がドイツ語に翻訳されて後者となっていることが判った。

『音声学の教程』には更に複雑な事情が存在している。初版には標題紙に翻訳者の氏名が明記されていたものが、1913年に刊行された第2版では抹消されており、そこには原著者イエスパasnの名前のみが記されているのである。そして翻訳者自体もビュルゲル・グドウィンに変更されているが、これに関する釈明がイエスパasn自身が書いた序文に見られる。即ち、「初版はダフィットセン博士が引き受けたが、この第2版ではグドウィン博士がドイツ語の徹底的な修正をしたので嘗ての翻訳者の名前を標題紙に残すことはしない」(Jespersen (1913:IV))との由である。それならば「徹底的な修正」を施したグドウィンの名前を出す必要はないのであろうか。その答えは「必要はない」である。何故ならば、何と第2版は増補した点を除けば、殆ど初版と同様だからである。6章と7章には大きな増補が見られるものの、他は段落冒頭の文頭の副詞や接続詞を取り替えただけのものなのである。

このように学問領域の奥深く分け入ると従来、信じてきたことが覆されることがよくある。ソシュル理論を学びたいければ流布しているCLGを使用するのがごく普通感覚であろうが、

時として代替理論を学ばされることになる場合もありうることを理解するためにも本質に迫った文献学的方法論が要請されるのである。

但し、CLGの位置付けを考えれば、この編著が後世の種々多彩な人文学領域の研究に与えた甚大な功績を考慮の外におくことは最早、無意味である。これらは偏にパイイとセシエの英断があったからこそ成し得たのである。日本においても時枝誠記が論争を巻き起こし、学界が活性化したのも世界初のCLGの翻訳を成し遂げた小林英夫の訳業のお陰であることは論を俟たない。しかし、誤って伝えられた熱狂の裏に潜んでいる真実と虚偽を見極めることが人文学研究において最も肝要なことであることは強調しておきたい。人文学の場合、「選りすぐられた良い研究が後世に伝えられる」のではなく、「多くの良い研究のごく一部が偶然に近い形で残るだけで、たとえ良質の研究でも気づかれずに葬り去られていく」のである。それ故人文学のあらゆる遺産を残して後代に伝えていく必要も痛感される。

人文学研究は「人」、即ち多くの研究者、「本」、即ち文献資料、そして「デイタ」、即ち自身で収集した一次資料という三つの基本的構成要素から成ると筆者は考えている。(詳細は「方法論(別稿)」に譲る。)この中で「人」に関してイエスパスン『音声学の教程』に纏わる人物に関してごく簡単に触れておく。同書初版の翻訳者であるドイツの言語学者、ヘルマン・クリスティアン・ダフィットセンは翻訳を手掛けた時に23歳程であり、ほぼ同時期の1903年にキールでフランス語に関する学位論文を出版している。1907年から1911年にかけてノルウェー語・デンマーク語語源辞典のドイツ語訳(筆者未見。前島(1973:91)にこの語源辞典への言及があるが、ダフィットセンの名前は挙げられていない)も刊行しており、学者としての能力に不足はないと思われるが、イエスパスンにとって何が不満であったかは定かではない。第2版の翻訳に携わったヘンリ・ビュルゲル・グドウィンことドイツ人で後にスウェーデン国籍を取るハインリヒ・ビュルゲルはダフィットセンより2歳年長で、奇しくも同じ1903年にキョエブンハウンの王立図書館所蔵のアイスランド語写本『年譜集』の研究によりライプツィヒ大学より学位を得ている。^{38 bis)}

後に写真家として名を挙げたグドウィンの数奇な人生も然ることながら、ダフィットセンの存在は後の言語学、特に音韻研究の面で間接的に多大な影響を及ぼすことになる。『コーネル校友新聞』1909年2月17日号を見ると、ハンブルク大学を休職してコーネル大学に来ていたヘルマン・ダフィットセン博士がドイツ語の助教授に任命され、9月から発効するという記事が掲載されている。^{38 ter)}そして、この翌年に精華大学より奨学生として趙元任(チャオ・ユエン・ジェン)がコーネル大学にやって来てダフィットセンの音声学の講義に出ているのである。チャオの『言語と記号体系』を邦訳した橋本萬太郎は「訳者あとがき」にて「Hermann Davidsen 教授[?]について一般音声学をならい、はじめてIPA(国際音声字母)に接して、眼からウロコがとれたおもいがしたという。これが[...]チャオの一生をさだめるのである。」(チャオ(1980:323))と書いている。ダフィットセンがイエスパスン『音声学の教程』を翻訳するためには相応の音声学の知識が要求されると共に、訳業が完了した後はその精髓を吸収したはずであり、その音声学の知識をチャオに伝えたわけである。もし、ダフィットセンが『教程』の翻訳に携わらなかったなら、もし、彼がコーネル大学に来なかったなら、もし、チャオが米国留学しなかったなら、等々の仮想をしてみても、運命の巡り合わせはチャオを非凡な言語学者に仕立てたことだけは事実である。その後、チャオはイエスパスン等と共に音声学や言語学の世界で多くの優れた貢

38 bis) グドウィンに関しては Östlund (2000) 参照。

38 ter) *Cornell Alumni News*, Vol. XI, No. 20, February 17, 1909, p. 232a. (http://ecommons.library.cornell.edu/bitstream/1813/3173/20/011_20.pdf)

献をなしたのである。人文学研究とはこのような人間と人間の魂の闘ぎ合いからその本質を選び抜く営為であり、常に人間の息遣いが感じられねばならないと筆者は考えるのである。

学問的精神の自由

筆者の個人的感想であるが、マクス・ヴェーバ（ウェーバー）を始めとして末川博、家永三郎、新村猛等の著作を読んだ際に心の奥底から沸き出でる元気づけられるような爽快感や充実感には、「人は利害を無視して行動することがしばしばある。それが「思想」というものだ」（松尾（2005:375）所引）という桑原武夫の言葉に集約されるような気がする。「私としては永く歴史に残るにちがいない「精神的自由を守る」活動に加わってきたのを生涯の光栄と思う」（家永（2003:238-39））と家永三郎が自身の人生を振り返ったように学問の如何を問わず、³⁹⁾ その求めるものは功利ではなく精神的慰藉なのである。彼らの行動原理は現在の社会で忘却されている「人間の尊厳」の徹底的な護持と崇敬であり、“man doth not live by bread only”であることを身をもって示してくれたのである。⁴⁰⁾

「元来、教育のことは、将来に関している。三年後、五年後、十年後に国家社会に役立つような人間を育成するのが、教育本来の任務である。だから、いやしくも教育に志す者は、常に将来を見つめながら、現実に生きねばならない。そこは、政治家と呼ばれる人たちが眼前の力によって支配され、実業家と呼ばれる人たちが眼前の利を追うに急であるのと、本質的にちがうところである」（末川（1954:37））にも拘らず、近年は全ての教育において既述のように「経済人から見た効率」が強制的に導入されているのである。⁴¹⁾ それに伴い、我々は本来、「聖域」として死守しなければならなかった「社会的共通資本」としての「教育」と「医療」を市場に出してしまったのである。⁴²⁾ その応報は必ず我々が受け取ることになるが、今後、人文学によって培われた人間性を抛り所としてあらゆる困難に対処していかなければならないのと同時に、これ又、人文学によって養われた国際的な視野で全地球規模の問題を解決していくことも要求される。⁴³⁾

昨今の日本社会を見ると、時間の流れの慌しさに筆者は非常な嫌悪感を覚える。反対に欧州や中国の文化に接するとそこに流れる悠久な時間にある種の畏れを持って暫し呆然とさせられる。例えば、スペイン・カタルニャ地方のバルサロナにある今も建築中の「サグラダ・ファミリア」即ち、「聖家族贖罪教会」は主任建築家のアントニ・ガウディ・イ・クルネッの名前で知られ、「カタルーニャの聖山であるモンセラットを連想」させる（外尾（2006:224））鐘塔を有

39) 自然科学の分野においても、例えば、数学者ジュール・アンリ・ポワソンは「科学者は實益あるが故に自然を研究するのではない。自然に愉悅を感じればこそこれを研究し、また自然が「一層内面的に」美しければこそこれに愉悅を感じるのである」（ポワソンの（1953:24））と書いている。

40) 国の発展のためなら自らの命も賭した幕末の話である。「緒方〔洪庵〕の書生が幾年勉強して何ほどエライ学者になっても、頓と実際の仕事に縁がない。[...] 前途自分の身体は如何なるであろうかと考えたこともなければ、名を求める気もない」、「自分の身の行く末のみ考えて、如何したらば立身が出来るだろうか、如何したらば金が手に這入るだろうか、立派な家に住むことが出来るだろうか、如何すれば旨い物を食い好い着物を着られるだろうか、というようなことにばかり心を引かれて、齷齪勉強するということでは、決して真の勉強は出来ないだろうと思う。」（福沢（1898-99=1978:92,94））このような思想は既に葬り去られてしまったのであろうか。自らの命と引き換えにするくらいの気概で人間性を深く見つめれば、“Jibun no Shōrai ga Futashika da to omō kurai, Ningen ni totte Anshin na koto wa arimasen ne!”（Isikawa（1977:53））というくらいの余裕を示すことができるかもしれない。

する教会であるが、1882年に建設が開始され、完成までに更に百年以上は優にかかるという。

時間の堆積故に形成された奥行きのある文化に関してここではくどい説明を省きたい。何故ならば、ただ、筆者の一つの体験談をここに記せば充分であると考えからである。それは1982年のことである。オーストリア科学アカデミ出版から何か書籍を買おうと思い、同出版社の書籍販売目録“Sprachwissenschaft/Stand vom Januar 1982”を見ていると、「MIKLOSICH, FRANZ R. v./Rumunische Untersuchungen. B. Mazedo^[sic]-rumunische Sprachdenkmäler. (D 32 [=Denkschrift, Band XXXII]) 1882. 92^[sic] Seiten, Quart, brosch./S 120,— DM 20,—」という書籍が目にとまった。1882年出版の復刻版か年号の誤植であろうと考えたが、筆者の必要とする分野の研究書と推察されたので早速、注文してみた。約半年後に到着した現品は、驚くことに当に古色蒼然とした四つ折判の紙装で未裁断本という19世紀の出版物(Miklosich (1882))であった。価格は20ドイツ・マルク(当時)若しくは120オーストリア・シリング(当時)ということで書籍輸入レートで3000円程度であった。100年前の書籍が新刊書として買える国に対して、当時も今も、日本では在庫の書籍は課税されるので、裁断してしまうという。筆者は2000年に日本で出版された書籍を2006年に求めようとしたが、もう既に入手不可能であった。入手しにくい特殊な本でも、流行に乗った低俗な本でもない。かなり有名な出版社から刊行されたイギリスの有名作家の翻訳著作集である。自国の著述を内から湧き出る誇りを持って徹底的に大切に守る文化と利那的

41) 某地方都市の金融界の要人が、「金銭感覚を身に着けさせるため」と称して、1億円の紙幣の山を小学校で児童に見せたという。金銭感覚は何も金員によってのみ培われるものではなく、普段の生活を始めとする世事の中で養われるものであろう。大金を使うのではなく、なるべく浪費しないことこそ金銭に対する大切な感覚であるはずなのに、社会はどこまで金輝に目が眩めば気が済むのであろうか。この金融界のドンは不換紙幣がどれほどの価値を持っていると考えているのであろうか。一度、インフレーションが起きれば、或は、戦争に負ければ紙屑同然になるのである。何よりも、本当に「ビッグ・マネー」を扱う人々には実際には「現生」を手にすることはないのである。その都市の産業界も大学を含めた教育界もこの人物に大いに依存しているということを知ると暗澹たる思いになる。

究極のところ、このような金銭に対する発想を変えることなしには人文学の没落を止めることはできない。『びんぼう自慢』という自伝もある古今亭志ん生のように金権とは無縁の感覚こそ当に清貧を旨とする学者の本分に通底するものであろう。また、志ん生のような斯道における一流人が他の分野(人文学も例外ではない)にもいなくなったことが文化の危機を招いているのであろう。嘗て小島政二郎が当代の断家は明治や大正の断家に比べれば三流以下であると評したのを基に小出昌洋は「いまは押し並べてどの分野も、三流以下かも知れない」と言う。(小出(2001:6))学者はサラリーマンではなく、職人であり、芸術家であらねばならないと筆者は自身に言い聞かせている。

42) 「社会的共通資本」に関しては宇沢(2000)及び宇沢(2007)を参照。宇沢はフリードマン流の「規制緩和」や「民営化」という「市場原理主義」に対抗すべく、人間が人間として生きていくために重要な社会共通の財産を次世代に伝えていくことの必要性を訴えている。

43) 近年、頓に話題になっている「少子化問題」であるが、僅か30年前においては世界における急激な人口爆発を受けて、人口抑制が奨励されてきたことを考えるとこの種の学問の危うい浮動性に危機感を感じる。1974年7月2日～4日に開催された「日本人口会議」では「人口静止」が叫ばれ、「“子供は二人まで”という国民的合意を得るよう努力すべきである」という会議宣言が採択されている。(篠崎(編)(1974:198-200))「お陰様で」それ以降の合計特殊出生率は人口置換水準を下回り現在に至っているのである。

しかし、世界規模での人口増加に関する問題は依然、解消されておらず、国際的な視点からは30年前の感覚こそが正しいのではなかろうか。近年の「少子化問題」は年金等の社会保障制度や労働力に絡めて議論されるため、非常に金銭的視点が強く、近視眼的、或は視野狭窄的な発想に陥らないか懸念される。同様に「2007年問題」と言われる大量の定年退職者出現も彼らが出生した半世紀以上前に(この世代の死亡率の大幅な増加がない限り)自ずから判っていたことである。この間、無施策だったことの反省を踏まえて遠い将来を見据えることができる国民になることが急務である。

時間の流れを悠然と捉える視点を与えることができるのが当に本来の人文学であり、知識や技芸の伝承及び外国人を遇するに際しての国際感覚の涵養等は筆者の強調するところでもある。

で金銭と時間のみにはしか関心を示さない文化、どちらが人間の営みとして高級であると考えるのは各人の判断に委ねたい。

人間性を求めた人文学研究を身近な存在にするために先人の業績を辿ることも必要であり、そのために筆者は碩学の伝記や手記を読むことを努めて行っている。例えば、筆者が高校生の頃読んだ簡単な伝記(牧野(1976))では若きレナード・ブルムフィールドによるエドワード・プロコシュ宅での回想を記している。後年、その出典となる原典を取り寄せ、原語の雰囲気味わったりしたものである。“On a small table in Prokosch’s dining room there stood a dozen technical books (I seem to remember that Leskien’s Old Bulgarian grammar was among them) and in the interval before lunch Prokosch explained to me their use and content. By the time we sat down to the meal, a matter perhaps of fifteen minutes, I had decided that I should always work in linguistics.”(Bloomfield(1938:311-12))プロコシュのように食卓の上に研究書を並べることを模倣していた往時の自分を想起するにつけ、碩学になりたいという願望が研究への情熱をかき立てることを思い知るのである。また、この同じ小伝にはブルムフィールド自身への回想もあり、ウィリアム・ムルトンが記す「ブルムフィールドは一般言語学とアルゴンキン語族の専門家という固定観念があった。しかし、彼のゲルマン語の一般的知識と古代高地ドイツ語、特にオットフリッドの知識は驚異的だった。オットフリッド関係の論文、博士論文などはほとんど持っていた。[...]彼が書棚からゴート語の聖書を取り出して、読んだばかりのオットフリッドの構文と類似の箇所を指摘してくれた姿が今でも髣髴とする」(牧野(1976:95a))という件を読んだ時、自分も将来、このような大言語学者に少しでも近づきたいという想念に満たされていた。⁴⁴⁾

文献を読む際にも筆者はその著者自体に成りきることを目指している。ソシュルの身になってジュネヴのような鄙俚で村儒として教鞭をとる心中を察することも、またマッテオ・ジュリオ・バルトリ『ダルマティア語』を読みながら、死亡したと思っていたダルマティア語最後の生粋の話者、トゥオネ・ウダイナ-ブルブル Tuóne Udajna-Búrbur (Bartoli(1906:I, Sp. 22)。表記は筆者が変更)と再会した時の一入の歓喜を味わうことも、これらの研究者と一体になることにより実感できるのである。(北村(1998d)参照)⁴⁵⁾

「客観性」が科学としての一つの要件ならば、人文学の回復は、今やそのように冷静ではいられないような熱情をもって当たる、当に生きた人間への回帰であるのかもしれない。本稿が「人文学」を標榜し、「人文科学」と称しない所以である。

以上、人文学研究の方法論に先立つ序奏として人文学という学問に向かうためのあるべき姿勢を筆者なりに示したつもりである。時代錯誤と受け取られかねないような見解も敢えて数多、

44) 某認知神経科学研究者が書いた『天才はなぜ〜』という本があり、トマス・エディソン、アルベルト・アインシュタイン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ハンス・クリスティアン・アナスン(アンデルセン)、グレイム・ベル、ウォルト・ディズニという6人の大天才が学習障害であったため、「それを代償しようと常になく他の能力が発揮され」た、というのである。何をか言わんや!先人を尊敬して自らもそのような人物になろうと志を抱く子供たちの希望を削ぐことに関する責任をこの著者は感じないのか。これも真実を追究する学問のためであるところの著者が若しも主張するのならば、敢えて言うが、採り上げた各天才が有する障害と「代償作用」との関係が明確ではなく、特にヴィンチ(因にフィレンツェよりもピストイヤの方が近い)のレオナルドの章では減裂である。「知的障害はなぜ進化したか」という章題の最終章も天才出現との関連付けがなされていない。学習障害ならば皆、天才になれるのかを考えれば、このような言説の不当性が顕になるのである。障害者の苦しみや「非障害者」の無関心や驕りを充分に承知した上で高言する次第である。また、専門的観点からすれば、アナスン(アンデルセン)に関する言語学的な記述の多くは誤りである。「このひと、まずアンデルセンのお話でも聞いたほうがいいかもしれないよ。」Nu skulle vi høre!

述べてきた。しかし、「古臭い」と余人が考える当の時代が知性豊かであったことを想起するにつけて、やはり筆者はその成熟した黄金時代の学行に立ち返るべきであると考え。（「古」字の用法には「古いから悪い」という義は殆どなく、むしろ「いにしへの趣を懐かしむ、典故とすべき」という意味で使われることが多い。日本にもこのような思想が嘗ては存在していたが、今やその片鱗すら見出すことは難しい。）

「方法論（別稿）」の一部ではあるが、しかし、重要な諸点がある時は知性や教養と関連付け、ある時は社会や大学を始めとする教育に関する諸問題に託けて、また、ある時は注釈中の短い文言によって、それとなく、随所に散りばめるように工夫を凝らした。些かの留意が必要かもしれないが、本導論を読むだけでも人文学の方法論の輪郭が判るようにしてきたつもりである。

本稿導論の結句としてハル・メギドン *הַרְמָגֵדוֹן הַרְמָגֵדוֹן* の戦場を駆け巡るかのようなラ・マンチャの郷士 *Hidalgo de la Mancha*, 憂い顔の騎士 *Caballero de la Triste Figura* の大音声を借りて関の声としたい。⁴⁶⁾

——「逃ぐるな、臆病で卑怯な奴ばらめ。汝達に切り込むは、ゆいつの騎士なるぞ。」
（筆者による試訳）“Non fuyades, cobardes y viles criaturas, que un solo caballero es el que os acomete.”
（Cervantes (1605-15=1990:90)）

La grande perte las que feront les letres
Avant le cicle de Latonia parfait :
Feu, grand deluge, plus par ignares sceptres,
Que de longs siecles ne se verra refaict.
(Nostradamus (1555=1996:136))

大きな損失をば蒙らん、悲しいかな、学芸は、
ラトニアの循環期が完結せんよりさきに。
そは火、大洪水、なににもまして無知なる王杖によらん、
永き世紀を経て損失が償われんまでは。
(ノストラダムス (1555=1999:68))

45) プワンカレは「フクス関数」に纏わる新発見をした時の感動を述べている（ポワンカレ (1953:56ff.)) が、自然科学的分野においても読者が著者と一体になることにより更なる研究の啓発に益すると筆者は理解する。

また、本導論にて先に指摘した「Arbëresh」を扱った某研究者も言語データを他人の研究書からではなく、一次資料から直接、自身の手により引き出せば、より豊かな研究が可能になると思うが、如何なるものであろうか。

46) 同時に、恰も筆者のみが絶対で真正であるとの主張と受け取られかねないような筆者自身の数多言説により庶人は辟易の気味にあるかもしれない。今、ここに騎都尉、李陵を擁護し、全軀保妻子の臣等に抗弁した太史令、司馬遷が宮刑に処せられた境涯を思い起こす。「恐ろしく我の強い男だつたが、今度の事で、己の如何にとるに足らぬものだつたかを沁々と考へさせられた。理想の抱負との威張つて見た所で、所詮己は牛にふみつぶされる道傍の蟲けらの如きものに過ぎなかつたのだ。」（中島敦 (1943:93a)）

しかし、筆者の言わんとすることは...否、もう止めておこう。「益セント欲スレハ反ヘテ損ス。是以テ抑鬱シテ誰ニ語ル無シ。」——『漢書、司馬遷伝』評林本（班固 (1st cent. AD=1972: 669b)） C.Q.F.D

[別稿]「人文学の没落（方法論）」の主な内容（一部、予定も含む）

人文学とは

人文学方法論

1. 人文学の基本
2. デイタ重視の「デイタ」とは？
3. 新しいものほど良い？—「古い本を使うのは良くない」か？
4. 今や国際語である「英語で書かれたものは良質な研究」か？
5. 原典重視1—翻訳の危うさ
6. 原典重視2—引用の危うさ
7. 各版の検討
8. 文献探索法
9. 「書海」・「書林」—膨大な文献との対峙
10. 密なる世界への回帰、あるいは異文化への誘い
11. 普遍的 vs. 一時的—「書名はイタリック」？
12. 未来に向けて

(参考) 文献学・言語学研究の視点から

主要引用資料一覧

本導論の続編「人文学の没落（方法論）」において引用する資料も併せて掲載した。掲載順序は著者名、或は団体名のラテン・アルファベット順である。（邦人等の漢字名は主として著者または団体の使用するラテン文字表記に基づき、翻訳された人名については原綴に基づいて配置した。）同一著者においては直接、引用した資料の年代順に配列した。また、敢えて翻訳も原著と同様に独立させた。（この点に関しては「方法論（別稿）」にて述べる。）なお、本邦刊の文献の出版地が東京である場合は出版地に関する書誌記述を通例と同じく省略した。ほとんどの書籍の出版が東京に集中していることにも日本における出版文化（だけではなく、あらゆる文化）の偏狭性が見られるのである。

本導論の本文中や北村（2001b:8）でも述べたように、筆者は引用資料や参考資料の一覧にその論考の趣意が、ひいては当該論考の著者の学問に対する世界観が発現するものと信じている。

アイスキュロス [Αἰσχύλοσ] (5th cent. BC=1964) 「縛られたプロメテウス」 呉 茂一（訳）、高津春繁（編）『世界古典文学全集 8. アイスキュロス・ソポクレス』筑摩書房、昭和39年、pp. 5-24.

青柳清孝 (2006) 『ネイティブ・アメリカンの世界』古今書院。

荒 正人 (1975) 「斎藤勇——人間の尊さを教える」, in: 朝日新聞社 (1975:107-09).

アーノルド, マシュー [Arnold, Matthew] (1965) 『教養と無秩序』多田英次（訳）、岩波、改版、昭和40年。(22刷、昭和48年(初版、昭和21年)。原著：復刻版、1935年(初版、1869年)；原刊：1867-68年)

朝日新聞社 (1975) 『ほんとうの教育者はと問われて』朝日新聞社。(4刷、1978年)

Ascoli, G. I. (1873) “Saggi ladini”, *AGI*, I, pp. 1-556. (Torino: Bottega d’Erasmus, ristampa, 1972)

Bally, Ch. ([1913]) *Ferdinand de Saussure et l’état actuel des études linguistiques. Leçon d’ouverture du cours de linguistique générale, lue le 27 octobre 1913, à l’Aula de l’Université*, Genève: Atar.

Bartoli, Matteo Giulio (1906) *Das Dalmatische. Altromanische Sprachreste von Veglia bis Ragusa und ihre Stellung in der apennino-balkanischen Romania*, 2 Hefte, Wien: Hölder.

Bloomfield, Leonard (1925) “Why a Linguistic Society”, *Lg*, I, pp.1-5.

Bloomfield, L. (1938) “Obituary: Eduard Prokosch”, *Lg*, XIV, pp. 310-13.

Böckh, August (1886) *Encyclopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, hrsg. von Ernst Bratuscheck, Leipzig: Teubner, zweite Aufl.

- Capidan, Th. (1925-[35]) *Meglenoromâni*, 3 volume, București : Cultura Națională / Imprimeria Națională.
- Cervantes, Miguel de (1605-15=1990) *El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, texto, introducción y notas de Martín de Riquer, Barcelona : Planeta, edición revisada y puesta al día, “Clásicos Universales Planeta”, décima edición. (primera edición en esta colección, 1980)
- Chao, Yuen Ren [趙元任] (1968) *Language and Symbolic Systems*, London / New York : Cambridge University Press.
- チャオ, ユアン_[マ]・レン [Chao, Yuen Ren] (1980) 『言語学入門——言語と記号システム』橋本萬太郎 (訳), 岩波. (原著 : Chao (1968))
- チョムスキー, ノーム [Chomsky, Noam] ([1967]) 『知識人の責任』清水知子 / 浅見克彦 / 野々村文宏 (訳), 青弓社, 2006年. (原著 : 1967年)
- チョムスキー, ノーム [Chomsky, Noam] (1976) 『デカルト派言語学——合理主義思想の歴史の一章』川本茂雄 (訳), みすず書房. (4刷, 2002年. 原著 : 1966年)
- チョムスキー, ノーム [Chomsky, Noam] (1999) 『言語と思考』大石正幸 (訳), 松柏社. (3刷, 2006年. 原著 : 1994年)
- チョムスキー, ノーム [Chomsky, Noam] (2005) 『チョムスキー, 民意と人権を語る』岡崎玲子 (取材), 鈴木主税 (論文翻訳), 集英社.
- Crystal, David (2002) *Language Death*, Cambridge : Cambridge University Press, “Canto edition”. (Orig.: 2000)
- Dixon, R. M. W. (1997) *The Rise and Fall of Languages*, Cambridge : Cambridge University Press.
- ディクソン, R. M. W. [Dixon, R. M. W.] (2001) 『言語の興亡』大角 翠 (訳), 岩波. (原著 : Dixon (1997))
- 土井忠生 / 森田 武 / 長南 実 (編訳) (1980) 『邦訳日葡辞書』岩波.
- フレミング, ヴィクター [Fleming, Victor] (監督) (1939) 『オズの魔法使い』主演 : ジュディ・ガーランド, 作詞 : E. Y. ハーパーグ, 作曲 : ハロルド・アーレン, MGM. (原題 : *The Wizard of Oz*)
- フォックス, ジェレミー [Fox, Jeremy] (2004) 『チョムスキーとグローバリゼーション』坂田薫子 (訳), 岩波. (原著 : 2001年)
- 藤田英時 (1990) 『常識でわかるパソコン』ナツメ社.
- 福沢諭吉 (1898-99=1978) 『新訂 福翁自伝』富田正文 (校訂), 岩波. (原刊 : 明治31-32年)
- Gröber, Gustav (hrsg.) (1888) *Grundriss der romanischen Philologie*, Bd. I, Strassburg : Trübner.
- Guasti, Maria Teresa (1996) “A Cross-Linguistic Study of Romance and Arbëresh Causatives”, in : Adriana Belletti / Luigi Rizzi (eds.) *Parameters and Functional Heads — Essays in Comparative Syntax*, New York / Oxford : Oxford University Press, pp. 209-38.
- 班 固 (1st cent. AD=1972) 『和刻本正史 漢書』全2巻, 長澤規矩也 (解題), 古典研究會 / 汲古書院, 昭和47年. (原刊 : 洛陽 [=京都] 今出川 : 林和泉掾板行 / 松栢堂, 明曆3年. 原著 : 凌稚隆 (輯校) 『漢書評林』, 明萬曆辛巳年)
- [ハート, ホーレス [Hart, H.]] (1983) 『オックスフォード大学出版局の表記法と組版原則』小池光三 (訳), ダヴィッド社. (原著 : 38版, 1978年 (初版, 1893年))
- 長谷川太郎 (1992) 『新村猛氏を悼む』『中日新聞』夕刊, 平成4年11月2日.
- 橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』弘文堂, 昭和53年.
- 橋本万太郎 (1985) 『语言地理类型学』余 志鸿 (译), 北京 : 北京大学. (原著 : 橋本 (1978))
- 橋本萬太郎 (1990) 『언어지리유형학』하 영삼 (옮김), 서울 : 학고방. (原著 : 橋本 (1978))
- 服部四郎 (1947) 『國語ローマ字の綴字法の研究』研究社, 昭和22年.
- 服部四郎 (1954) 『音聲學』岩波, 3刷. (23刷, 1974年 (1刷, 1951年))
- 服部四郎 (1984) 『音声学』岩波. (原刊 : 1951年)
- 本城二郎 (1989) 「チェコスロバキアの言語事情」大阪言語研究会例会発表資料, 平成元年7月2日.
- 家永三郎 (2003) 『一歴史学者の歩み』岩波. (原刊 : 1977年他)
- Isikawa Takuboku [石川啄木] (1977) *Romazi Nikki*, 桑原武夫 (編訳), 岩波. (2刷, 同年. 原著 (手稿) : 1909年4月-6月及び1911年10月)
- 泉井久之助 (1968) 『ヨーロッパの言語』岩波.
- Jacoby, Russell (1987) *The Last Intellectuals. American Culture in the Age of Academe*, New York : Basic Books.
- Jakobson, Roman (1963) “Le Langage commun des linguistes et des anthropologues”, in : *Essais de linguistique générale*, t. I, Paris : Minuit, pp. 25-42. (Orig. text: 1953)
- Jespersen, Otto (1897-99) *Fonetik—En systematisk fremstilling af læren om sproglyd*, København : Schuboth.
- Jespersen, Otto (1904a) *Lehrbuch der Phonetik*, autorisierte Übersetzung von Hermann Davidsen, Leipzig / Berlin : Teubner. (Orig.: Jespersen (1897-99: “Fonetikkens specielle del”))

- Jespersen, Otto (1904b) *Phonetische Grundfragen*, Leipzig / Berlin : Teubner.
- Jespersen, Otto (1913) *Lehrbuch der Phonetik*, [übersetzt von H[ermann] Davidsen, revidiert von H. Buerger Goodwin], Leipzig / Berlin : Teubner, zweite Auflage. (Orig.: Jespersen (1897-99: “Fonetikkens specielle del”))
- Jespersen, Otto (1938) *En sprogmands leved*, København : Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.
- イエスベルセン, オットー [Jespersen, Otto] (1962) 『イエスベルセン自叙伝——ある語学者の一生』 前島儀一郎 (訳), 研究社. (原著 : Jespersen (1938) の抄訳)
- Jespersen, Otto (n. d.) *Selected Writings of Otto Jespersen*, London : Allen and Unwin / Tokyo : Senjo.
- Jones, Daniel ([1943]) *Linguaphone, Cardinal Vowels*, London / New York : Linguaphone Institute.
- カーン, アルバート・E. [Kahn, Albert E.] (編) (1991) 『パプロ・カザルス 喜びと悲しみ』 吉田秀和 / 郷司敬吾 (訳), 朝日新聞社. (原刊 : 1973年. 原著 : 1970年)
- 貝塚茂樹 / 藤野岩友 / 小野 忍 (編) (1959) 『角川漢和中辞典』 角川, 昭和34年. (137版, 昭和49年)
- カーナン, アルヴィン [Kernan, Alvin] (編) (2001) 『人文科学に何が起きたか・アメリカの経験』 木村武史 (訳), 玉川大学. (原著 : 1997年)
- 木村直司 (2003) 「ゲーテ文学頌——ゲルマニスティクに関する反時代的考察」 上智大学ドイツ語圏文化研究所講演会, 2003年9月27日 (<http://www.info.sophia.ac.jp/g-areas/bunnkakouryu.htm>).
- 金田一春彦 / 大野 晋 / 鈴木松美, 他 (1976) 「日本語むかしむかし——縄文・弥生のことばをさぐる」 NHK 総合テレビジョン放送, 1976年2月11日放映.
- 金田一京助 (1964) 『金田一京助随筆選集2. 思い出の人々』 三省堂, 昭和39年. (3版, 昭和46年)
- 北村一親 (1979) 「スペイン語と日本語の音体系に関する対照研究」 スペイン大使館懇賞応募論文.
- 北村一親 (1981) 「アラン・R・トマス 「ウェールズ言語語地理学への寄与」』 『ウェールズ語研究』 3号, pp. 26-40.
- 北村一親 (1982) 「ケルト語の特徴——ウェールズ語を例として」 *Persona*, No. 3, pp. 1-4.
- 北村一親 (1983) 「言語学——言語の研究——とは」 *Persona*, IV, pp. 7b-9b.
- 北村一親 (1987) 「スペイン語におけるラテン語 CT [kt] の音変化」 『名古屋大学言語学論集』 3巻, pp. 103-42.
- 北村一親 (1988a) 「スペイン語の母音のサウンド・スペクトログラフによる分析——スペイン語教育のための日本人学習者との発音比較」 *Argumentation*, Vol. 4, pp. 54-59.
- 北村一親 (1988b) 「英語の Nasal Epenthesis のサウンド・スペクトログラフによる分析」 *Argumentation*, Vol. 4, pp. 44-53.
- 北村一親 (1988c) 「イタリア語ロンバルディア方言におけるラテン語 CT の変遷」 『名古屋大学人文科学研究』 17号, pp. 53-64.
- 北村一親 (1988d) 「サルディーニャ語最古の文献における CT」 『名古屋大学人文科学研究』 17号, p. 75.
- 北村一親 (1988e) 「18世紀の Moscopole におけるアルーマニア方言」 『ロマンス語研究』 21号, pp. 15-24.
- 北村一親 (1988f) 「日英語の子音の音響分析による対照研究——英語音声教育のために」 『名古屋学院論叢』 1987 (昭和62) 年号 (創立100周年特集号), pp. 157-81.
- 北村一親 (1988g) 「ガリシア語音韻論の諸問題」 『名古屋大学言語学論集』 4巻, pp. 143-70.
- 北村一親 (1989a) 「言語接触について」 『名古屋大学人文科学研究』 18号, pp. 47-50.
- 北村一親 (1989b) 「ガリシア語 Ourense 方言の特徴について」 『ロマンス語研究』 22号, pp. 21-30.
- 北村一親 (1989c) 「『ロランの歌』サン・マルコ図書館写本 225 (ex fr. IV) の言語」 『名古屋大学言語学論集』 5巻, pp. 83-100.
- 北村一親 (1990a) 「日本におけるポルトガル語資料」 『ロマンス語研究』 23号, pp. 49-60.
- 北村一親 (1990b) “Sur les parlers franco-provençaux”, *Nagoya Working Papers in Linguistics*, Vol. 6, pp. 29-45. (フランス語文)
- 北村一親 (1990c) 「キリシタン研究におけるロマンス語学の寄与」 『名古屋キリシタン文化研究会会報』 39号, pp. 314-15.
- 北村一親 (1991a) “El cambio fonético del grupo latino /kt/ en los romances y el albanés”, *Nagoya Studies in Humanities*, Vol. 20, pp. 109-18. (スペイン語文)
- 北村一親 (1991b) 「スペイン語における l, n の口蓋化」 『ロマンス語研究』 24号, pp. 145-53.
- 北村一親 (1992a) 「文化接触における言語の諸相」, 岩手大学人文社会科学部総合研究委員会 『文化の基礎理論と諸相の研究』, 盛岡 : 同委員会, pp. 123-36.
- 北村一親 (1992b) 「文化と言語」, 岩手大学人文社会科学部総合研究委員会 『文化の基礎理論と諸相の研究』, 盛岡 : 同委員会, pp. 47-53.

- 北村一親 (1992c) 「ケルト語の特異性」『アルテス・リベラレス』50号, pp. 1-16.
- 北村一親 (1997a) 「יהודה הַלֵּוִי [Yehūdā Halevī] の ḥarḡa における母音について」『人間・文化・社会』, 盛岡: 岩手大学人文社会科学部地域文化基礎研究講座, pp. 167-82.
- 北村一親 (1997b) 「プロヴァンス語 (オクシタン語) の CT について」『アルテス・リベラレス』60号, pp. 1-13.
- 北村一親 (1997c) 「音響分析に基づくヴィエトナム語声調の《Stoßkorrelation》に関する研究」『アルテス・リベラレス』61号, pp. 1-26.
- 北村一親 (編) (1998a) 『岩手大学人文社会科学部比較言語学研究室論集』盛岡: 岩手大学人文社会科学部比較言語学研究室.
- 北村一親 (1998b) 「論浪漫語学」, in: 北村 (編) (1998a: 67-71).
- 北村一親 (1998c) 「カタルーニャ語における -ACT-, -ECT- の変化時期について」, in: 北村 (編) (1998a: 81-84).
- 北村一親 (1998d) 「ダルマチア語における CT の発展について」『アルテス・リベラレス』62号, pp. 1-17.
- 北村一親 (1998e) 「『イストリア言語学』研究序説」『アルテス・リベラレス』63号, pp. 1-16.
- 北村一親 (1998f) 「レト・ロマンス語におけるラテン語《Occlusiva velare sorda + Occlusiva dentale sorda》の変遷に関する言語地理学的試論」『人間行動科学の教育の新たな展開をめざして——人間行動に対する学際的アプローチの総合化の試みに関する基礎的研究』第3分冊, 盛岡: 岩手大学人文社会科学部行動科学研究講座, pp. 74-105.
- 北村一親 (編) (1999a) 『言語の制御と統合に関する多角的視点からの研究——言語学・音声学・認知心理学・分析哲学・情報科学・情報統計幾何学・法学からの貢献』(平成10年度教育改善推進費研究報告書, 代表: 北村) 盛岡: 岩手大学人文社会科学部.
- 北村一親 (1999b) 「音声——音響分析と音韻分析」, in: 北村 (編) (1999a: 59-74).
- 北村一親 (1999c) 「ロマンス語文献学に関する文献目録——ロマンス語・ポルトガル語・ガリシア語・カタルーニャ語」, in: 北村 (編) (1999a: 97-102).
- 北村一親 (1999d) 「ヴィエトナム語声調に関する文献目録」, in: 北村 (編) (1999a: 103-05).
- 北村一親 (1999e) 『ロマンス語学論集』第1集, 盛岡: 岩手大学人文社会科学部比較言語学研究室.
- 北村一親 (1999f) 「ロマンス語文献学・言語学導論」, in: 北村 (編) (1999e: v-vii).
- 北村一親 (1999g) 「Νοτιοϊταλικά Ελληνικά 研究に関する覚書」, in: 北村 (編) (1999e: 67-72).
- 北村一親 (1999h) 「フランス語歴史音声学覚書」『アルテス・リベラレス』64号, pp. 1-10.
- 北村一親 (1999i) 「バルカン・ロマンス語と環アドリア海ロマンス語——ラテン語子音連続 CT に関して」『ロマンス語研究』32号, pp. 78-87.
- 北村一親 (1999j) 「イタリア語諸方言における CT の変遷の諸」『アルテス・リベラレス』65号, pp. 1-16.
- 北村一親 (2000a) “Repertório bibliográfico da lírica trovadoresca galego-portuguesa”, *Artes Liberales*, Vol. 66, pp. 1-21. (ポルトガル語文)
- 北村一親 (2000b) “Repertório bio-bibliográfico dos trovadores da lírica galego-portuguesa, I”, *Artes Liberales*, Vol. 67, pp. 1-18. (ポルトガル語文)
- 北村一親 (2000c) “Ricerca comparativa su due redazioni del *Romanisches etymologisches Wörterbuch* di Wilhelm Meyer-Lübke”, *Nagoya Working Papers in Linguistics*, Vol. 16, pp. 73-86. (イタリア語文)
- 北村一親 (2001a) 『ロマンス諸言語における音形の伝播と拡散のメカニズムに関する総合的研究』(平成10-12年度文部省 / 日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書).
- 北村一親 (2001b) “„Zeuses pande“ og „Januses ansigt“—— Småbidrag til oversættelse”, *Artes Liberales*, Vol. 68, pp. 1-11.
- 北村一親 (2001c) “Aproximació a l'estudi de la «llengua algueresa»—— De la dialectologia catalana a la lingüística algueresa”, *Artes Liberales*, Vol. 69, pp. 1-24. (カタルーニャ語文)
- 北村一親 (2002) “К вопросу о румынском диалекте в «Молдавии»”, *Artes Liberales*, Vol. 70, pp. 9-11. (ロシア語文)
- 北村一親 (2003) 『東京外国語大学大学院・平成14年度2学期(後期)集中講義講義要録・ロマンス諸語比較研究(2003年1月7日~10日)』盛岡: 私家版.
- 北村一親 (2004a) 『ロマンス語辞典編纂学における語源辞典の比較に関する基礎的研究』(平成13-15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書).
- 北村一親 (2004b) “Origine e storia della lessicografia romanza —— I dizionari etimologici”, *Artes Liberales*, Vol. 74, pp. 1-19. (イタリア語文)
- 北村一親 (2004c) “Algunhas consideracións sobre o sistema consonántico da lingua galega”, *Artes Liberales*, Vol. 75, pp. 1-18. (ガリシア語文)
- 北村一親 (2005) 「18世紀のアンドレイ・タタリノフ露和語彙集の研究(第1部)」『アルテス・リベラレス』76号, pp. 1-12.

- 北村一親 / 久保英文 (1998) “Magyar elemek az oláh nyelvben”, in : 北村 (編) (1998a: 77-80). (ハンガリー語文)
- 北村一親 / 久保英文 (2002) “Краткий очерк венгерского диалекта «чанго»”, *Artes Liberales*, Vol. 70, pp. 1-9, 12. (ロシア語文)
- 北村一親 / 佐藤正恵 (2006) 「彼ら地を受け継がん——障害学生支援に向けて」『アルテス・リベラレス』78号, pp. 1-33.
- 小林一仁 (2003) 「学校教育における「漢字」学習」『しにか』14巻4号, 2003年4月, pp. 50-56.
- 小林康夫 / 船曳建夫 (編) (1994) 『知の技法』東京大学出版会. (35刷, 2002年)
- Koch, Josef (hrsg.) (1959) *Artes Liberales von der antiken Bildung zur Wissenschaft des Mittelalters*, Leiden / Köln : Brill.
- 小出昌洋 (2001) 「随読随記」『日本古書通信』66巻9号, 平成13年9月, pp. 4-7.
- Körting, Gustav (1896) *Handbuch der romanischen Philologie*, Leipzig : Reisland.
- クーン, トーマス [Kuhn, Thomas S.] (1971) 『科学革命の構造』中山 茂 (訳), みすず書房. (原著 : 1962年)
- Lawrence, Frieda (1934) “*Not I, but the Wind ...*”, New York : The Viking Press, first trade ed., Oct., 1934. (second printing, Nov., 1934)
- 町田 健 (2003) 『ソシュール入門』光文社.
- 前島儀一郎 (1973) 「私の辞書——デンマーク語学書案内」小林英夫 (編) 『私の辞書』丸善, 昭和48年, pp. 87-94. (5刷, 昭和56年)
- 牧野成一 (1976) 「L・ブルームフィールド (リレー連載 = 大言語学者たち・19)」『言語』5巻10号, 1976年10月, pp. 94-100.
- 松尾尊兌 (2005) 『滝川事件』岩波. (2刷, 同年. 原刊 : 1985-2004年他)
- 松阪市本居宣長翁関係遺品調査委員会 (1967) 『本居家所蔵図書目録』1, 松阪市 : 鈴屋遺蹟保存會, 昭和42年.
- メナンド, ルイス [Menand, Louis] (2001) 「学問的権威の消滅」, in : カーナン (編) (2001:206-23). (原著 : 1997年)
- マートン, ロバート・K. [Merton, Robert K.] (1961) 『社会理論と社会構造』森 東吾 / 森 好夫 / 金沢 実 / 中島竜太郎 (訳), みすず書房, 昭和36年. (原著 : 改訂版, 1957年 (初版, 1949年))
- Miklosich, Franz (1882) *Rumunische Untersuchungen, I. Istro- und macedo-rumunische Sprachdenkmähler*, zweite Abtheilung [B. *Macedo-rumunische Sprachdenkmähler*], Wien : Holzhausen. (Separatabdruck aus dem XXXII. Bande der *Denkschriften der philosophisch-historischen Classe der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*)
- ミラー, G. A. [Miller, George A.] (1983) 『入門 ことばの科学』無藤 隆 / 久慈洋子 (訳), 誠信書房. (原著 : 1981年)
- 三宅 苞 (2004) 「J. ザイマンのアカデミック科学モデル」『社会技術研究論文集』Vol. 2, Oct. 2004, pp. 21-29 (<http://shakai-gijutsu.org/ronbun2/21.pdf>).
- 茂木俊彦 (2005) 『都立大学に何が起きたのか——総長の2年間』岩波.
- 文部科学省 (2001) 「大学 (国立大学) の構造改革の方針」平成13年6月 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/14/01/020199a.htm).
- 文部科学省高等教育局 (2002) 「大学 (国立大学) の構造改革の方針について」平成14年1月 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/14/01/020199b.htm).
- 文部省 (1949) 『ローマ字教育の指針・ローマ字文の書き方』昭和24年2月. (発表 : 昭和22年2月28日)
- 文部省 (1958) 『筆順指導の手びき』博文堂, 昭和33年3月. (56版, 昭和45年7月)
- 盛岡市先人記念館 (2003) 『田丸卓郎と田中館愛橘——日本ローマ字物語』第29回盛岡市先人記念館テーマ展, 平成15年9月6日-11月3日.
- マリガン, ロバート [Mulligan, Robert] (監督) (1962) 『アラバマ物語』主演 : グレゴリー・ベック, 音楽 : エルマー・バーンスタイン, Universal International. (原題 : *To Kill a Mockingbird*.)
- 村上陽一郎 (1994) 『科学者とは何か』新潮社. (16刷, 2005年)
- Murasaki Shikibu [紫式部] (c. 1000=1978) *The Tale of Genji*, 2 vols., translated with an Introduction by Edward G. Seidensticker, Tokyo : Tuttle. (tenth printing, 1988)
- 長澤和俊 (2003) 「シルクロードにかけた夢, 1」『しにか』14巻4号, 2003年4月, pp. 100-03.
- 中島 敦 (1943) 「李陵」『文學界』10巻7号, 昭和18年7月, pp. 76-108.
- 中島文雄 (1932) 「英語學とは何か」『言語・文學論纂 京城帝國大學法文學會』第二部論纂第4輯, pp. 35-132. 『日葡辞書』(1603-04=1960) = 『日葡辞書 Vocabulario da lingoa de Iapam』土井忠生 (解題), 岩波. (オクスフォード大学ポドリ文庫本の影印)
- Nostradamus, Michel (1555=1996) *Les Premières Centuries ou Propheties (édition Macé Bonhomme de 1555)*, édition et commentaire de l'*Epître à César* et des 353 premiers quatrains par Pierre Brind'Amour, Genève : Droz.
- ノストラダムス [Nostradamus, Michel] (1555=1999) 『予言集』P. プランダムール (校訂), 高田 勇 / 伊藤 進 (編訳), 岩波. (原著 : Nostradamus (1555=1996))

- 大島良行 (1981) 『アメリカ・ウェスタン辞典』 研究社, 昭和56年.
- 岡倉覚三 (1961) 『茶の本』 村岡 博 (訳), 岩波, 改版. (103刷, 2005年 (初版, 1929年). 原著 (英語) : 1906年)
- 奥平康弘 (2006) 『治安維持法小史』 岩波. (原刊 : 1977年)
- Östlund, Olle (2000) “Henry B. Goodwin — En svensk nationalfotograf” (<http://www.bostream.nu/ostlind/goodwin/>).
- Pedersen, Holger (1924a) *Sprogvidenskaben i det nittende århundrede. Metoder og resultater*, Kjøbenhavn : Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.
- Pedersen, Holger (1924b) *Språkvetenskapen under nittonde århundradet. Metoder och resultat*, bemyndigad översättning från danskan av Hans Reuter-crona, Stockholm : Norstedt och Söner. (Orig.: Pedersen (1924a))
- Pedersen, Holger (1931) *Linguistic Science in the Nineteenth Century. Methods and Results*, translated by John Webster Spargo, Cambridge, [Mass.]: Harvard University Press. (Orig.: Pedersen (1924a))
- Pedersen, Holger (1962) *The Discovery of Language. Linguistic Science in the Nineteenth Century*, translated by John Webster Spargo, Bloomington : Indiana University Press, “Midland Book edition”. (Orig.: Pedersen (1924a))
- ペデルセン [Pedersen, Holger] (1974) 『言語学史』 伊東正正訳, こびあん書房. (原著 : Pedersen (1962))
- ポワンカレ, [アンリ] [Poincaré, Henri] (1953) 『科学と方法』 吉田洋一 (訳), 岩波, 改訳, 昭和28年. (16刷, 昭和42年. 原著 : 1908年)
- ポパー, カール・R [Popper, Karl Raimund] (1971) 『科学的発見の論理』 全2巻, 大内義一 / 森 博 (訳), 恒星社厚生閣. (4刷, 1984年. 原著 : 1959年; 原刊 : 1935年)
- リッケルト, [ハインリヒ] [Rickert, Heinrich] (1939) 『文化科学と自然科学』 佐竹哲雄 / 豊川 昇 (訳), 岩波, 昭和14年. (3刷, 昭和16年. 原著 : 7版, 1926年 (初版, 1898年))
- Ronjat, Jules (1930-41) *Grammaire istorique des parlers provençaux modernes*, 4 tomes, Montpellier : Société des Langues Romanes.
- 佐伯啓思 (2006) 『学問の力』 NTT 出版.
- サイド, エドワード・W. [Said, Edward W.] (1998) 『知識人とは何か』 大橋洋一 (訳), 平凡社. (9刷, 2006年. 原著 : 1994年)
- 齊藤 孝 (1977) 『学術論文の技法』 日本エディタースクール, 昭和52年. (4刷, 昭和53年)
- Sapir, Edward (1921) *Language. An Introduction to the Study of Speech*, New York : Harcourt, Brace and Company.
- サピア [, エドワード] [Sapir, Edward] (1943) 『言語——ことばの研究序説』 木坂千秋 (訳), 刀江書院, 昭和18年. (原著 : Sapir (1921))
- サピアー, エドワード [Sapir, Edward] (1957) 『言語——ことばの研究』 泉井久之助 (訳), 紀伊國屋. (原著 : Sapir (1921))
- サピア, エドワード [Sapir, Edward] (1998) 『言語——ことばの研究序説』 安藤貞雄 (訳), 岩波. (原著 : Sapir (1921))
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally / Albert Sechehaye, avec la collaboration d'Albert Riedlinger, Lausanne / Paris : Payot.
- Saussure, Ferdinand de (1922) *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally / Albert Sechehaye, avec la collaboration d'Albert Riedlinger, Paris : Payot, seconde éd.
- [ソッスユール, フェルディナン・ド] [Saussure, Ferdinand de] (1928) 『言語学原論』 小林英夫 (訳), 岡書院. (原著 : Saussure (1922))
- Saussure, Ferdinand de (1931) *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally / Albert Sechehaye, avec la collaboration d'Albert Riedlinger, Paris : Payot, troisième éd.
- ソシユール, フェルディナン・ド [Saussure, Ferdinand de] (1940) 『言語学原論』 小林英夫 (訳), 岩波, 「改譯新版」. (原著 : Saussure (1931))
- Saussure, Ferdinand de (1967) *Corso di linguistica generale*, introduzione, traduzione e commento di Tullio De Mauro, Bari : Laterza. (seconda ed., 1968. Orig. : 1962)
- ソシユール, フェルディナン・ド [Saussure, Ferdinand de] (1972) 『一般言語学講義』 小林英夫 (訳), 岩波, ソシユール (1940) の「改称版」. (原著 : Saussure (1931), 1949年版)
- Saussure, Ferdinand de (1985) *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally / Albert Sechehaye, avec la collaboration d'Albert Riedlinger, éd. critique préparée par Tullio De Mauro, postface de Louis-Jean Calvet, Paris : Payot.
- ソシユール [, フェルディナン・ド] [Saussure, Ferdinand de] / デ・マウロ, トゥリオ [De Mauro, Tullio] (1976) 『ソシユール一般言語学講義』 校注』 山内貴美夫 (訳), 而立書房. (原著 : Saussure (1967) (trad. di T. De Mauro), 1970年版)

- Σεφέρης, Γιώργος (1979) *Ποιήματα*, [Αθήναι]: Ίκαρος, δωδέκατη έκδοση. (πρώτη έκδοση, 1940)
- 新村 猛 (1994) 『新村猛著作集2. 「世界文化」三十年代の政治思想的証言』三一書房.
- 新村猛追悼集刊行委員会 (1995) 『緑の樹——新村猛追想』同時代社.
- 篠崎信男 (編) (1974) 『日本人口問題の現状——日本人口会議をめぐって』人口問題研究会, 昭和49年.
- 白川 静 / 渡部昇一 (2001) 『知の愉しみ, 知の力』致知出版社, 平成13年.
- Sh [kurtaj], Gj [ovalin] (1985) “Të folmet arbëreshe”, in : *Fjalor enciklopedik shqiptar*, Tiranë : Akademia e Shkencave e RPSSH, f. 1091a.
- ソーカル, アラン / ブリクモン, ジャン [Sokal, Alan / Bricmont, Jean] (2000) 『「知」の欺瞞——ポストモダン思想における科学の濫用』田崎清明 / 大野克嗣 / 堀 茂樹 (訳), 岩波. (10刷, 2005年. 原著 : 1997 / 1998年)
- 外尾悦郎 (2006) 『ガウディの伝言』光文社.
- Spitzer, Leo (hrsg.) (1928) *Hugo Schuchardt-Brevier. Ein Vademecum der allgemeinen Sprachwissenschaft*, Halle (Saale): Niemeyer, zweite erweiterte Auflage. (erste Aufl., 1922)
- 末川 博 (1954) 『教育・學問・自由』青木書店.
- 末川 博 (1975) 「吉田松陰——体制との戦いを貫く」, in : 朝日新聞社 (1975:13-15).
- 杉山満丸 (2007) 「杉山茂丸 夢野久作 憂国と文学をつなぐもの (日本の親子100人——この素晴らしき絆)」『文藝春秋』85巻3号, 平成19年2月, pp. 322b-24a.
- Tagliavini, Carlo (1972) *Le origini delle lingue neolatine. Introduzione alla filologia romanza*, Bologna : Pàtron, sesta ed. (VI ristampa, 1981)
- 滝川幸辰 (1960) 『わたくしの大学批判』民主教育教会.
- 瀧川幸辰 (1963) 『激流——昭和レジスタンスの断面』河出書房新社, 昭和38年.
- 田丸卓郎 (1942) 『ローマ字文の研究』日本のローマ字社, 4版, 昭和17年. (初版, 大正9年)
- Tanakadate, A [ikitu] (1933) “[Appendix. Proposal]”, in : *Proceedings of the International Congress of Phonetic Sciences, Amsterdam 3-8 July 1932*, Harlem : Enschedé et Fils., p. 216. (Extrait des *Archives néerlandaises de phonétique expérimentale*, VIII-IX)
- Thomas, Dylan (1968) *Deaths and Entrances*, London : Dent. (reprinted, 1971. Orig.: 1946)
- Thomsen, Vilh [elm] (1919-31) *Samlede afhandlinger*, 4 bind, København / Kristiania : Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.
- トムセン, ヴィルヘルム [Thomsen, Vilhelm] (1937) 『言語學史——その主要點を辿りて』泉井久之助 / 高谷信一 (訳), 東京 / 京都 : 弘文堂書房. (原著 : 1902年. Thomsen (1919-31:I,1-106) に再録)
- Tiktin, H. (1895-1925) *Rumänisch-deutsches Wörterbuch (Dicționar român-german)*, 3 volume, București (București) : Imprimeria Statului.
- Tiktin, H. (2001-05) *Rumänisch-deutsches Wörterbuch*, 3 Bde., hrsg. von Paul Miron / Elsa Lüder, Wiesbaden : Harrassowitz, 3. neubearbeitete Auflage.
- Trubetzkoy, N. S. (1939) *Grundzüge der Phonologie (TCLP, 7)*, Prague : Cercle Linguistique de Prague. (publié avec l'appui du Cercle Linguistique de Copenhague et du Ministère de l'Instruction Publique de la République Tchéco-Slovaque)
- 内村鑑三 (1905) 『外國語の研究』警醒社, 6版, 明治38年. (初版, 明治32年)
- 植島啓司 (1989) 「ジュスチーナとジュリエット」『太陽』334号, 1989年6月, p. 23c-d.
- 植草甚一 (1972) 『雨降りだからミステリーでも勉強しよう』晶文社. (13刷, 1976年)
- 宇沢弘文 (2000) 『社会的共通資本』岩波. (6刷, 2004年)
- 宇沢弘文 (2007) 「社会的共通資本としての医療」日医総研創立10周年記念シンポジウム, 平成19年5月31日 (<http://www.med.or.jp/nichikara/jmari10/190531/kiroku/si2.pdf>).
- 和田祐一 / 松澤真子 / 崎山 理 (1985) 「外国語への招待・フィールドワークは言葉から (2) [言語のビジン化について]」NHK ラジオ第2放送, 1985年11月8日放送.
- 渡部昇一 (1962) 「文献学の理念と実践」『ソフィア』11巻2号, pp. 44-64.
- 渡部昇一 (1996) 『英文法を撫でる』東京 / 京都 : PHP 研究所.
- Weber, Max (1919) *Wissenschaft als Beruf*, München / Leipzig : Duncker und Humblot. (Geistige Arbeit als Beruf. Vorträge vor dem Freistudentischen Bund. Erster Vortrag)
- ウェーバー, マックス [Weber, Max] (1980) 『職業としての学問』尾高邦雄 (訳), 岩波. (改訳・72刷, 1995年. 原著 : 1968年刊の論集第3版; 原刊 : Weber (1919))
- Wilamowitz-Moellendorff, U. von (1927) *Geschichte der Philologie*, Leipzig : Teubner, 3. Auflage. (Nachdruck, 1959)

- 山本哲朗 (2004) 「伝承したい学問における先達」『じゅあ』(大学基準協会) 32号, 2004年3月, p. 7.
- 吉川幸次郎 (1978) 『NHK 大学講座, 杜甫詩抄』日本放送出版協会, 昭和53年.
- 吉川幸次郎 (1981) 『華音杜詩抄』筑摩書房, 昭和56年.
- 席 宣 / 金 春明 [Xi Xuan / Jin Chun-ming] (1996) 『“文化大革命”簡史』北京: 中共党史.
- X[oxi], K[oli] / Bo[zhori], K[oço] (1985) “Arbëreshët e Italisë”, in : *Fjalor enciklopedik shqiptar*, Tiranë : Akademia e Shkencave e RPSSH, f. 33b-34a.
- Ziman, John (1994) *Prometheus Bound — Science in a Dynamic Steady State*, Cambridge / New York / Melbourne : Cambridge University Press.
- ザイマン, ジョン [Ziman, John] (2002) 「何のための科学か?: 科学の非道具的な社会機能 (日本語訳・講演要旨)」社会技術研究フォーラム, 2002年11月15日 (<http://ristex.jp/event/images/intllec01.pdf>).